



人文学部研究紹介冊子

信州大学人文学部 研究紹介

2017-2018

信大人文学部スタッフの 研究最前線ファイル



信州大学人文学部長
山田 健三

どのような分野でも、研究は日々進んでいます。大学を卒業し
てずいぶん経った社会人の方が抱いている「常識」はもちろんの
こと、現役の高校生の皆さんが用いている教科書に現に書いてあ
ることも、既に研究の世界では塗り替えられていたり、塗り替え
つつある、ということは全く珍しくありません。テレビのドキュ
メンタリー番組や新刊図書でもその一端は垣間見られるでしょ
う。でも、そこは「最前線」ではありません。研究活動は生きて
いる人間がやる以上、「最前線」は研究者に影のように貼りつい
ています。

人文学は「人の営為（＝人文）」を研究対象とする学問分野全
般を指しますが、人が人の行いを理解しきることは、実はなかな
か困難。「異文化理解」とか「歴史との対話」とか表現はシンプ
ルですが、そんな簡単ではありません。簡単でないからこそ、こ
れまでの常識も疑いつつ、優れた研究者は日夜果敢に問題に取り
組んでいます。

さて、本冊子は、大学および大学院進学を考えている受験生の
皆さんにも、大学の「人文知」と社会とをキュレートする出版・
新聞・放送などのマスメディア関係者にも、またコミュニティ問
題・文化行政問題などに腐心されている行政諸機関にも、はたま
た研究連携などを考えている他研究機関や他分野の方々にも、信
大人文の研究スタッフの研究最前線を一覧することで、頼れる専
門家が身近にいることを示そうとしたものです。研究は大学とい
う組織や AI が行っているわけではありません。すべて生身の人
間。本冊子が皆さんの「知」のアクセスポイントとして利用され
ることを願っています。

目次

哲学・芸術論コース

教授	篠原 成彦	2
教授	早坂 俊廣	3
准教授	三谷 尚澄	4
准教授	護山 真也	5
教授	金井 直	6
准教授	北村 明子	7
准教授	濱崎 友絵	8

文化情報論・社会学コース

教授	菊池 聡	9
准教授	佐藤 広英	10
准教授	水原 俊博	11
准教授	茅野 恒秀	12

心理学・社会心理学コース

教授	今井 章	13
准教授	高瀬 弘樹	14
准教授	岡本 卓也	15
准教授	清水 健司	16
准教授	長谷川孝治	17

歴史学コース

教授	山本 英二	18
教授	大串 潤児	19
准教授	佐藤 全敏	20
准教授	豊岡 康史	21
准教授	佐藤(田村) 真紀	22

比較言語文化コース

教授	野津 寛	23
教授	澁谷 豊	24
教授	氏岡 真士	25
准教授	伊藤加奈子	26
准教授	磯部 美穂	27
助教	葛西 敬之	28
教授	吉田 正明	29
准教授	鎌田 隆行	30

英米言語文化コース

教授	伊藤 盡	31
教授	杉野健太郎	32
准教授	飯岡 詩朗	33

日本語文化コース

教授	渡邊 匡一	34
准教授	速水 香織	35
教授	山田 健三	36
准教授	白井 純	37
教授	沖 裕子	38
准教授	坂口 和寛	39



●研究分野 言語哲学, 心の哲学

●現在の研究テーマ

1. 自然主義の可能性

ここで言う「自然主義」とは、人間のさまざまな営みも含めて、この世界で起きることは結局すべて自然現象だといえるんじゃないか、という見とおしのことです。実際、自然現象だとは考えにくいものが、けっこうあるんですよ。たとえば善悪とか、心とか、数とか、言語とか、あるいは色だとか。私が長らく取り組んできたのは、この種のを自然主義的な世界像の中にうまく位置づける手立ての探索です。

2. 色の存在論

意外に知られていないことですが、我々が見ている色はものが有する物理的性質ではなく、ものが反射する光の性質でもありません。しかしそうだとしたら、どうして色はものに備わった性質のようにしか見えないのでしょうか。ものの表面に無いのなら、色はどこにあるのでしょうか。いや、そもそも色は、どこかに「ある」と言っていよいよなものなのでしょうか。私は、我々を困惑させるこういった一連の問いに、満足な答えを与えることを目指しています。

研究から広がる未来と将来の進路

哲学するために求められ、哲学することで身につく技能のひとつに、＜問いをうまく立てる技能＞というのがあります。もうちょっと具体的に言うと、＜解き方の道筋が見えてくるような問いの立て方をする技能＞です。さまざまな職場で求められる問題解決能力っていうやつのは、結局これだと思いますよ。

主要学術研究業績

- 2015年「手短な独我論論駁」『信州大学人文科学論集』第2号（通算49号）
規則に従うという現象にかんするウィトゲンシュタインの洞察を援用して、独我論を論駁しています。
- 2011年「事物は色をもちうるか」『哲学の探求』第38号（若手哲学者フォーラム）
色にかんする2種類の機能主義的理論を取りあげ、両者が抱えている困難について論じています。
- 2009年「言語の起源／起源の言語」『岩波講座哲学』第3巻（岩波書店）所収
言語起源にかんする仮説が乱立している現状を、自然主義的観点から肯定的に特徴づけています。
- 2008年「クオリアとクオリア実感」『感情とクオリアの謎』（昭和堂）所収
いわゆるクオリア（感覚質）にかんする消去主義の戦略を提示しています。
- 1994年「投機としての自然主義」『科学哲学』22号（日本科学哲学会）
自然主義は思想としてではなく、投機的なプロジェクトとして扱われるべきであると論じています。

所属学会と学会での活動

- 日本哲学会
- 日本科学哲学会
- 科学基礎論学会
- 中部哲学会（現在、役員および編集委員）
- 西日本哲学会

経歴

1995年、九州大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学の後、東京都立大学人文学部助手を経て、信州大学人文学部助教授（後に准教授）、2013年より同教授。

哲学・芸術論コース

哲学・思想論分野

●教授 早坂 俊廣



●研究分野 中国哲学

●現在の研究テーマ

1. 宋から清にかけての中国思想史、いわゆる「朱子学」と「陽明学」を研究しています。こういう書き方をしますと、何だか朱子や王陽明を「偉い人」と崇め奉っているような印象を与えてしまうかも知れませんが、どちらかと言えばその逆で、彼らのような人たちがどういう脈絡（地縁、人間関係、記録の伝わり方等々）のなかで「偉い人」として描かれるようになっていったのか（専門的な言い方をすれば、「中国近世浙東地方における思想伝承・思想史叙述の様態」）を研究しています。
2. いわゆる「朱子学」と「陽明学」では、「心」「性」「命」「理」などといった思想概念が議論の俎上にあがります。こういった彼らの議論のさまを、可能な限り当時の脈絡に寄り添いつつ、しかし現代の日本に生きている自分自身が実感をもって理解できるように研究しています。言語体系も生活環境も大きく異なる「彼ら（未知の友人たち）」との「対話」を重ねていくことを通して、現代の日本に生きている自分の「立ち位置」を見極めたいと考えています。これが、私の考える「比較哲学」の実践です。

研究から広がる未来と将来の進路

「中国の古典」を読むということは、空間的にも時間的にも現代日本と大きく隔たった知の世界に触れる体験となります。その体験を通して、未来を見通す力や多文化共生の術が体得されたならば、それらは様々な進路に応用可能なスキルとなりましょう。

主要学術研究業績

【著書】

- * 小島毅（監修）早坂俊廣（編集）『文化都市 寧波』（東京大学出版会 2013年刊）
「東アジア海域に漕ぎだす」シリーズの第2巻です。同巻全体の編集をするとともに、第Ⅱ部第3章「思想の記録／記録の思想－寧波の名族・万氏について」とコラム「『中国のルソー』を育んだもの」「寧波の英雄・張煌言」を執筆しました。

【論文】

- * 早坂俊廣「潘平格の生涯と思想」（『東洋史研究』第73巻第2号、pp.101—135 2014年9月）
明末清初の思想家である潘平格を正面から取り上げた本邦初の論文です。
- * 早坂俊廣「場所の記憶／全祖望の記録」（『中国—社会と文化』第27号、pp.196—211 2012年7月）
清代の思想家である全祖望が様々な「場所」をどのように「記録」したのかを検討することを通して、彼の思想を解明した作品です。

所属学会と学会での活動

「日本中国学会」「東方学会」「中国社会文化学会」「広島哲学会」「比較思想学会」に所属しています。
また、これまで「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成」「王畿の良知心学と明末の講学活動に関する基礎的研究」「王畿の良知心学と明末の講学活動に関する発展的研究」「陽明門下の講学活動と「会語」資料に関する総合的研究」といった共同研究（科学研究費補助金）に参加してきました。

経歴

1993年3月広島大学大学院文学研究科（中国哲学・インド哲学専攻）博士後期課程単位取得退学。1993年4月国立北九州工業高等専門学校（一般教育）専任講師。その後、同助教授を経て、2002年4月信州大学人文学部助教授。その後、同准教授を経て、2015年4月から同教授。

哲学・芸術論コース

哲学・思想論分野

●准教授 三谷 尚澄



●研究分野 西洋哲学, 倫理学, 分析アジア哲学, 社会哲学

●現在の研究テーマ

1. ウィルフリッド・セラーズとロバート・ブランドムという、20世紀／21世紀アメリカの哲学者を研究している。その中心的問いは、「現代英米哲学における「プラグマティズム」と「表出主義」という二つの大きな潮流が合流するとき、どのような哲学的展望が切り開かれることになるのか」というものである。
2. 「現代日本の倫理的・社会哲学的課題をめぐる市民論的考察」をテーマとする研究。これまでのところ、「現代日本に生きる若者たちの死生観」と「大学における哲学／人文学教育の意義」に関する二編の単著（『若者のための〈死〉の倫理学』および『哲学しててもいいですか』）を公刊した。そして、これらの成果に続く第3の業績として、「コミュニケーション能力とリーダーシップ」をテーマとする単著原稿を準備中である。
3. 13世紀日本の仏教思想家である道元と、20世紀日本の哲学者・西田幾多郎の思想について、現代西洋哲学との橋渡しを試みる研究を行っている。

研究から広がる未来と将来の進路

「高度の汎用性を有した思考のツール」としての「批判的・論理的思考」の能力と、他者にみずからの見解を否定されることを恐れず、他者と異なる考えでも自分自身の言葉で発信することのできる強靱な思索の習慣（勇気）の涵養を目指して授業を行っています。「市民的器量 civic virtue」を有した「世界市民」であれば、世界中のどこにでも、どのような分野にでも、自信をもって羽ばたいていけると信じています。

主要学術研究業績

【著書】

- ◆ 『新・カント読本』（共著：牧野英二編、第21章「カントにおける生と死の倫理」を担当）、法政大学出版局、2018年
- ◆ 『哲学しててもいいですか？ 文系学部不要論へのささやかな反論』（単著）、ナカニシヤ出版、2017年
- ◆ 『若者のための〈死〉の倫理学』（単著）、ナカニシヤ出版、2013年

【論文】

- ◆ 'Picturing and Meta-linguistic Expressivism' *Naozumi Mitani, Contemporary and Applied Philosophy*, vol. 8, n. 2 (Japan Association for the Contemporary and Applied Philosophy), 2016
- ◆ 「表出主義的プラグマティストの真理観」、『アルケー』No.24, 2016
- ◆ 'The Return of the Dad: On Millikan-Brandom debate about the legacy of Wilfrid Sellars', *Shinshu Studies in Humanities*, vol. 2, 2015

所属学会と学会での活動

日本カント協会、日本哲学会、関西哲学会、京都哲学会、関西倫理学会、応用哲学会

経歴

京都大学文学部卒業（1997年）、京都大学大学院文学研究科博士後期課程学修退学（2002年）、文学博士（京都大学／2006年）、日本学術振興会特別研究員、カリフォルニア大学バークレー校客員研究員等を経て、信州大学人文学部准教授（2009年）



●研究分野 仏教認識論, 比較思想

●現在の研究テーマ

インド仏教を代表する思想家ダルマキールティ（7世紀）とその注釈者——特に未来原因説などの独創的理論で知られるプラジュニャーカラグプタ（8世紀）——の著作を中心に、「ブッダが全知者であることを全知者ではない人間がいかにして証明できるのか」「（インドにおける）神の存在証明の問題点はどこにあるのか」「肉体が減んだとしても死後にまで続く心の連続体を証明することは可能だろうか」「三世を見通すヨーガ行者にとって、過去・現在・未来の区別はどのように設定されるべきなのか」などの問題をめぐってこれらの学僧たちが展開した思索を読み解き、その哲学的意義を検証しています。彼らの思想は中国や日本の仏教（漢訳仏典）には伝えられていません。そのため、サンスクリット語やチベット語で書かれたテキストの校訂作業が必須の作業になります。

それ以外にも、東アジア世界に伝えられた仏教論理学（因明学）の展開、あるいは、西洋の諸思想における知覚論とインド哲学における知覚論の比較、そして道元の時間論なども研究しています。

研究から広がる未来と将来の進路

仏教思想を学ぶことで、信仰の対象としての仏教から離れたところに、仏教の本当の面白さがあることが分かるようになるでしょう。研究を進めていけば、仏教は、心をめぐる精緻な分析をはじめとして、言語学や論理学、認知科学など、周辺の領域と密接につながっていることが見えてきます。

主要学術研究業績

〔著書〕 *Omniscience and Religious Authority: A Study of Prajñākaragupta's Pramāṇavārttikālaṅkārahāṣya ad Pramāṇavārttika II 8-10 and 29-33*. LIT Verlag, 2014; 『シリーズ大乘仏教 9 認識論と論理学』（春秋社, 2012）〔第7章 全知者証明・輪廻の論証〕を分担執筆]

〔主要論文〕「仏教認識論とエナクティブ・アプローチ」『比較思想研究』第43号, 2017; “Toward a Better Understanding of Ratnakīrti's Ontology”, *Sambhāṣā*, Vol. 32, 2015; 「プラジュニャーカラグプタの〈知覚=存在〉説」『インド哲学仏教学研究』第22号, 2015; “A Comparison between the Indian and Chinese Interpretations of the Antinomic Reason (*Viruddhāvayabhicārin*)”, Chenkuo Lin & Michael Radich (eds.), *A Distant Mirror*, Hamburg University Press, 2014; “Ratnākaraśānti's Theory of Cognition with False Mental Images (**alīkākāravāda*) and the Neither-One-Nor-Many Argument”, *Journal of Indian Philosophy* 42, 2014; “On the role of abhyupagama in Dharmakīrti's scripturally based inference”, V. Eltchinger & H. Krasser (eds.), *Scriptural authority, reason and action*, Wien, 2013 など。

所属学会と学会での活動

比較思想学会・理事
日本印度学仏教学会・評議員
仏教思想学会, 東方学会・会員

経歴

1994年, 東京大学文学部(印度哲学専修)卒業, 1997年, 東京大学大学院人文社会系研究科(アジア文化研究専攻)修士課程修了(文学修士), 2001年, 東京大学大学院人文社会系研究科(アジア文化研究専攻)単位取得退学, 2005年, ウィーン大学大学院文献学・文化科学研究科博士課程修了(Dr. Phil.)

哲学・芸術論コース 芸術コミュニケーション分野

●教授 金井直



●研究分野 美学美術史学, キュレーション

●現在の研究テーマ

1. 彫刻を考えなおす～18世紀後期から19世紀初めにかけて活躍した彫刻家アントニオ・カノーヴァの作品研究を起点に、複製・表面・受容・制度など、彫刻をめぐる多様な論点について、調査・研究・発言をおこなっています。その対象は古代彫刻から近現代彫刻、インスタレーションまで広範ですが、最近はとくに石膏像の歴史と機能、近代的なモニュメントの出現・展開について関心をもって研究しています。
2. 現代美術と切り結ぶ～元美術館学芸員という経歴・経験を活かしつつ、現在もキュレーターとして活動しています。あわせて現代美術に関する執筆・批評もおこなっています。
3. ミュージアムと歩む～学芸員資格関連科目を担当する一方、長野県内の博物館・美術館の運営に多角的に協力。実践的に博物館の歴史・現在・将来について、考察・発言しています。

研究から広がる未来と将来の進路

美術を学ぶということは、たんなる趣味の一領域ではありません。さまざまな時代・地域の創造的な経験にふれることで、現在の私（たち）を見つめ直す大切な契機を獲得することです。美術が培う多様性や差異への愛情は、寛容な社会、開かれたコミュニティづくりにも欠かせない要素でしょう。

主要学術研究業績

【著書】『彫刻の問題』白川昌生、金井直、小田原のどか、トポフィル、(共著)、pp.72-93 (『代わりとしてのモニュメント、モニュメントの代わり』)、2017年。モニュメントを論ずることで、近代彫刻史の読み直しを試みました。同時に、歴史事象の表象可能性についても考察。

【論文】「ロダン効果 アントニオ・カノーヴァの場合」金井直、『オーギュスト・ロダン(1840-1917)－複合的視点でとらえる－』(静岡県立美術館ロダン館20周年記念国際シンポジウム記録論集) pp.85-93、2016年。ロダンを中心にすえた近代彫刻の言説がいかに我々の彫刻の見方を制御しているか、カノーヴァを事例に考えました。

【著書】『自然の鉛筆』畠山直哉、マイケル・グレイ、青山勝、ヘンリー・トルボット、金井直、ジュゼッペ・ペノーネ、赤々舎、(共著)、pp.64-75 (『写真と彫刻 あるいは互恵性』)、2016年。彫刻と写真という異なる芸術ジャンルの親和性と、写真技術の確立に彫刻が果たした役割について論じました。

所属学会と学会での活動

美学会、美術史学会、イタリア学会、地中海学会、表象文化論学会に参加。シンポジウムへの登壇や査読(投稿論文の審査)が活動の中心です。

経歴

2000～2007年、豊田市美術館学芸員。2007年より信州大学人文学部准教授。2017年より同教授。日印文化協定締結50周年記念美術展(国際交流基金主催)キュレーター(2007年)、あいちトリエンナーレ2016キュレーター。



●研究分野 舞踊学, 身体論

●現在の研究テーマ

1. 舞踊を中心とする身体論・パフォーマンス論の研究。ダンサー、振付家、演出家の視点から“メディアとしての身体”について思考。舞踊表現創作における、フィールドワーク、振付方法論、身体論、演出論について、実践的な舞台創作研究を通して探求。

2. アジアの伝統武術や舞踊における身体技法の実践的な研究。その土地特有の習慣から儀礼まで、生活に溶け込む芸術・芸能、それを取り巻く文化背景、風土環境、哲学的思考をリサーチし、伝承されていく身体技法について理論・実践を融合した研究を進める。また伝統と現代の身体技法や表現における繋がりを発展を探求。



2017年度はまつもと市民芸術館にて身体表現のワークショップを実施。学生とアーティストの交流から、身体表現に様々な角度から視座を投げかける実習授業を展開。

研究から広がる未来と将来の進路

舞台作品、身体表現を体験し、解釈することから、異なる思想・文化、様々なメッセージとコミュニケーション方法論を学ぶ。これは、多様な価値観が共存する現代社会における、芸術表現の役割の重要性を認識し、豊かな教養を経験を通して身につけていくことであり、芸術文化に携わる公的機関や企業の企画・制作、メディアに関わるあらゆる進路へと活路を開く。

主要学術研究業績

<舞台芸術実践研究>

・アジア国際共同制作舞台作品「Cross Transit」

演出・振付・構成, 平成 28 年 9 月 22 日 (松本市), 9 月 29-10 月 2 日 (東京), 平成 29 年 11 月 16/17 日 (プノンペン, カンボジア), まつもと市民芸術館, 一般財団法人松本市芸術文化振興財団主催, 平成 28 年度文化庁劇場・音楽堂等活性化事業助成, 公益財団法人せたがや文化財団 世田谷パブリックシアター提携, アーツカウンシル東京 (公益財団法人東京都歴史文化財団)・芸術文化振興基金助成事業, アジアンカルチュラルカウンシル (ACC) 協力

・「TranSenses」

演出・振付・出演, 平成 29 年 1 月 6,7 日, Japan Society N.Y 主催, 平成 29 年 4 月 27-30 日, Tangente, Montreal 主催, 招聘発表, 科学研究萌芽研究助成事業

所属学会と学会での活動

美術解剖学会, 舞踊学会所属

経歴

95' 文化庁派遣在外研修員。Bates Dance Festival (USA), American Dance Festival (USA) にて委託作品発表。代表作“finks”(01年国内初演)は多数都市にて上演, モントリオール HOUR 紙 2005 年ベストダンス作品賞受賞。05 年ベルリン「世界文化の家」委託作品 *ghostly round* は 2008 年まで世界各国で上演し, 絶賛を得た。2011 年インドネシア国際共同制作 *To Belong project* (第7回日本ダンスフォーラム賞受賞)を開始し, 国内外にて毎年新作を上演。2015 年 ACC 個人助成日米芸術交流プログラムグランティスト。2016 年アジアとのプロジェクト第2弾 *CrossTransit project* を始動, 2017 年はカンボジア, プノンペン市にて上演。2017 年, サウンドモーフィングとダンスの実験として, ソロ作品 *TranSenses* を NY, モントリオールにて発表。公式 HP www.akikokitamura.com



●研究分野 音楽学

●現在の研究テーマ

1. 音楽における東西交流史

主にトルコを中心とする音楽文化圏において、とくに19世紀から20世紀にかけて西洋化・近代化が音楽に及ぼした影響について、歴史的観点から研究しています。



口頭で伝承されてきたトルコ民俗音楽は、共和国初期時代を中心に五線譜化され、トルコ国民音楽の源典となっていました。

2. 音楽の伝承とその過程

現代という時間軸において、音楽伝統がどのように伝承されていくのか、音楽をとりまく人、記憶、コミュニティなどをキーワードに検証しています。グローバルな観点からは、ドイツにおけるトルコ系移民の音楽の伝承について、ローカルな観点からは、信州、とくに松本の芸能と音楽（御柱祭の木遣りや神楽など）をめぐる伝承とその過程に関心を寄せています。



2017年のゼミでは、御柱祭の木遣りの調査をおこないました。写真は諏訪大社下諏訪町木遣保存会の方々とゼミ生たち。

研究から広がる未来と将来の進路

音楽それじたいはもちろん、音楽を取り巻く文化や人々をも研究射程に入れる音楽学。実践的なアプローチに加え、言語や歴史学など他領域との接続によって、ローカルにもグローバルにも対応できる「知識と自分の言葉」を養うことを目指しています。こうした基礎力と実践力を身に付けた卒業生たちは、民間から公務員まで幅広い業種で活躍しています。

主要学術研究業績

【著書】

『トルコにおける「国民音楽」の成立』早稲田大学出版部、(モノグラフ83)2013年。

——トルコ共和国建国期において、「新しいトルコ音楽」創出をめぐる何が起っていったのか。

そのプロセスを言説、制度、音楽の三つの視角から検証した博士論文をまとめたもの。

『トルコを知るための53章』(共著)(編)大村幸弘、永田雄三、内藤正典、明石書店、pp.222-232、2012年。

——トルコ民俗音楽や共和国期に誕生した「新しいトルコ音楽」について紹介しています。

【論文】

「トルコにおける『アラベスク』の誕生と展開」信州大学人文科学論集2、pp.9-29、2015年。

「近代西アジアの音楽とヨーロッパ音楽との交渉：トルコを中心に」(共著、編集)他12名、柘植元一、植村幸生監修、国立情報学研究所 デジタルシルクロード 音楽編、2015年。

<http://dsr.nii.ac.jp/music/>

所属学会と学会での活動

東洋音楽学会(東日本支部委員)、日本音楽学会、地中海学会、日本中東学会

経歴

東京藝術大学音楽学部楽理科卒業、同大学大学院音楽研究科修士課程を経て、2008年、博士後期課程修了。博士(音楽学)。東京藝術大学教育研究助手、早稲田大学助教を経て、2014年より現職。

文化情報論・社会学コース

文化情報論分野

●教授 菊池 聡



●研究分野 認知心理学・クリティカルシンキング

●現在の研究テーマ

私たちの「心」の働きを一種の情報処理システムと考えて、人の知覚や思考、記憶などの認知の仕組みを理解する認知心理学の研究に取り組んでいます。中でも、日常生活でよく見られる人の「思い込み」や「錯覚」「誤信」が生じる仕組みやその対策について、実験室での実験的手法と、大規模な調査手法を組み合わせた実証的なデータ収集分析を行っています。こうした分析から、科学を装う「疑似科学」や、超自然現象を無批判に信じ込んでしまう心の働きを明らかにしています。

クリティカル・シンキング過程の心理学モデル



研究から広がる未来と将来の進路

認知心理学は、私たちの日常的な思考力の向上におおいに貢献します。こうした研究成果をもとに、多様な情報にまどわされることなく、的確な意思決定を行うための論理的で偏りのない思考スキルである批判的思考（クリティカルシンキング）を身につけることができます。

主要学術研究業績

【論文】

- 菊池 聡 (2017). 中学高校生の疑似科学信奉と科学への態度の関連性 信州大学人文科学論集, 4, 11-24
- Kusumi, T., Yama, H., Okada, K., Kikuchi, S. & Hoshino, T., (2016) A National Survey of Psychology Education Programs and Their Content in Japan. *Japanese Psychological Research*, 58, 4-18.

【著書】

- 『錯覚の科学』（2014, 放送大学教育振興会）
- 『なぜ疑似科学を信じるのか』（2012, 化学同人）
- 『自分だましの心理学』（2008, 祥伝社）他。

【翻訳（共訳）】

- ゼックミスタ&ジョンソン著『クリティカルシンキング入門篇・応用篇』
- シック&ヴォーン著『クリティカルシンキング 不思議現象篇』（北大路書房）など



所属学会と学会での活動

日本心理学会（教育研究委員会，調査小委員会委員：心理学の認識について調査研究を行い，心理学叢書 No.11『心理学って何だろう？ 4000人の調査から見える期待と現実』（誠信書房，2018）などにまとめています。他，日本教育心理学会（疑似科学と学校教育について研究発表），Japan Skeptics（監査委員），日本認知心理学会に参加。



経歴

1963年埼玉県出身 京都大学大学院教育学研究科博士課程中退。現在，信州大学地域防災減災センター長。

文化情報論・社会学コース

文化情報論分野

●准教授 佐藤 広英



●研究分野 社会心理学, 情報コミュニケーション学

●現在の研究テーマ

インターネット利用者の心理と行動

「SNS で個人情報勝手に公開される」「知らない人から連絡が届く」…。私たちはインターネットを利用する中でさまざまなトラブルに遭遇します。そういったトラブルが何故生じるのか、どのような人がトラブルに遭いやすいのかについて、社会心理学的観点から研究を行っています。



ストレスの潜在的評価

現代日本は「ストレス社会」と言われ、私たちは日々ストレスを抱えています。自分のストレスに気づかないまま生活し、病気にかかることもあります。そうしたストレスを潜在的に評価する方法を研究しています。



研究から広がる未来と将来の進路

インターネットに関する研究は、青少年や高齢者に対するメディアリテラシー教育への応用が期待されます。ストレスの潜在的評価に関する研究は、企業等での新たなストレスチェック法としての応用を目指して研究を進めています。卒業生の就職先は、公務員や民間企業（IT系など）が中心です。

主要学術研究業績

インターネット利用者の心理と行動

佐藤広英 (2017). 「青年期における SNS 利用時の対人ストレス過程に関する研究」

財団法人電気通信普及財団平成 28 年度研究調査助成 研究代表者

佐藤広英・太幡直也 (2016). 情報プライバシーに基づく SNS 利用者の類型化

メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 15-26.

ストレスの潜在的評価

佐藤広英 (2015). 「潜在連合テストを用いた新たな心理的・身体的ストレス測定法の開発」

科学研究費補助金若手研究 (B) 研究代表者

Sato, H. & Kawahara, J. (2012). Assessing acute stress with the Implicit Association Test.

Cognition and Emotion, 26, 129-135.

所属学会と学会での活動

- ・日本心理学会
- ・日本教育心理学会
- ・日本パーソナリティ心理学会 (学会誌編集委員)
- ・日本社会心理学会
- ・社会言語科学会
- ・日本老年社会科学会
- など

経歴

2009年3月筑波大学大学院人間総合科学研究科を修了(博士(心理学))。産業技術総合研究所・特別研究員、筑波大学大学院教育研究科・特任研究員などを経て、2012年10月より現職。



●研究分野 社会理論, 消費社会学, 社会調査法

●現在の研究テーマ

1. 社会理論

先端情報技術による社会的影響の様態把握 ⇒ 【方法】国内外の多様な理論的文献の批判的検討
(メディア論研究) ⇒ 【テーマ】実空間と情報＝仮想空間の複合状況

2. 消費社会学

消費社会論の再構築 ⇒ 【方法】乱立する諸理論の整理, 体系化
消費行動・意識に関する大規模調査研究 ⇒ 【方法】国際比較共同研究 (東京圏・上海など)
⇒ 【テーマ】消費態度, BMI, 幸福感の影響関係計量把握

3. 社会調査法

受託・共同調査研究 (自治体, 公益法人など) ⇒ 【方法】大規模調査研究 (長野)
⇒ 【テーマ】観光, 多文化, 防災減災, 文化, 食生活など

研究から広がる未来と将来の進路

民間企業 ⇒ 情報, リサーチ, 広告, 販売 (自動車, 服飾など), サービス (フード, ペットなど) など
公務員 ⇒ 市町村 (政令市, 中核市など) など
その他 ⇒ 進学 (準備を含む), 専門資格受験など

主要学術研究業績

【著書】

間々田孝夫編, 2015, 『消費社会の新潮流』立教大学出版会, 共著.

【論文】

- ・2011, 「記号消費志向的価値と公的生活」『経済社会学年報』33, pp.45-56, 単著.
- ・2011, 「消費主義者は選挙に行ったか? ——市民＝消費者と政治的シティズンシップ」『年報社会学論集』24, pp.204-14, 共著.
- ・2016, 「社会的現実の情報化＝仮想現実化——後期ボードリヤールとヴィリリオ」『応用社会学研究』58, pp.175-182, 単著.
- ・2016, 「多文化主義の規定要因の実証分析——松本市日本国籍住民調査 (2014) のデータ分析を中心に」『地域ブランド研究』, 11, pp.15-26, 単著.



所属学会と学会での活動

日本社会学会
経済社会学会 (常務理事, 年報編集委員長)
関東社会学会
社会・経済システム学会

経歴

立教大学社会学研究科博士課程後期課程単位取得満期退学 (2005), 社会学博士 (同, 立教大学)
立教大学社会学部助手・助教 (2005-11)
非常勤講師 (現在: 立教大学・早稲田大学など)



●研究分野 環境社会学, 社会計画論, サステナビリティ (持続性) 学

●現在の研究テーマ

社会学に立脚して、環境問題を中心とする社会問題の解明と解決過程に関する実証研究を行っています。

1. 環境政策と環境運動の社会学

様々な主体によって社会問題や政策的課題を解決するためになされる相互作用的な努力の総体である「社会制御過程」の社会学理論の発展に向けて、環境問題の事例研究を積み重ねています。

2. 地域資源管理の社会的技術

地域に存する自然資源や文化資源を持続的に保管理するためのマネジメント手法や関係者の協働の形式に着目した社会的技術の体系化に取り組んでいます。近年は木育や里山再生、環境保全型農業、自然エネルギーなどの事例を通じて、ネオ内発的発展論の見知から新たな地域間連携の可能性に着目しています。

3. 環境エネルギー政策

原子力関連施設の立地が進む青森県下北半島と、長野県や東北地方を中心とした各地の自然エネルギーの普及・拡大過程の調査を通じて、エネルギー政策と地域開発のあり方を検証しています。

研究から広がる未来と将来の進路

社会学分野では、社会学理論と社会調査の方法を学びます。講義・実習を経て社会調査士（(一社)社会調査協会認定）の資格を取得することができます。卒業後の進路は多様ですが、社会調査の経験を活かし、マスメディア、公務員・NPOなど公共部門、企業の調査部門などで活躍する道が拓かれています。

主要学術研究業績

- 環境政策と環境運動の社会学（単著書 2014年 ハーベスト社）
→自然保護に関する環境政策が形成される過程で環境運動がどのような役割を果たし得るのかについて、独自のモデルを立ち上げた理論書。
- 「むつ小川原開発・核燃料サイクル施設問題」研究資料集（共編著書 2013年 東信堂）
→青森県下北半島における巨大地域開発の40年強の経過をめぐる重要基礎資料を体系的に収録し、問題の歴史的経緯を解明した1500頁に及ぶ資料・論文集。
- 地域間連携によるウッドスタートの可能性と課題（論文 2017年『地域づくり』）
→江戸期以来の縁を基礎にした、長野県伊那市産の木製おもちゃを用いた東京都新宿区の誕生祝い品事業の経過と成果について論じた。
- 地域における再生可能エネルギー事業化の現状と課題（論文 2016年『サステナビリティ研究』）
→地域に根ざした自然エネルギーの「統合事業化モデル」に基づき、事業化の焦点のひとつである資金調達をめぐる、地域金融機関の融資動向や市民出資の現状と課題について論じた。

写真上：聞きとり調査の様子
写真中：木工職人への調査
写真下：風力発電と太陽光発電



所属学会と学会での活動

環境社会学会(2015～19年理事／2011～13年・2015～19年研究活動委員／2013～15年編集委員)
日本社会学会, 地域社会学会, 東北社会学会
International Sociological Association / Research Committee on Environment and Society (RC24)



経歴

1978年東京生まれ。埼玉県立和光国際高校外国語科, 法政大学社会学部卒業, 法政大学大学院社会科学研究科修士課程・博士後期課程修了。博士(政策科学)。2001年より財団法人日本自然保護協会勤務。
2010年より岩手県立大学総合政策学部講師, 2013年, 同准教授。2014年より信州大学人文学部准教授。



●研究分野 生理心理学, 心理生理学

●現在の研究テーマ

1. 人が動いているものを「動いている」と知覚できるのはなぜか？ 問いはシンプルですが、この問いに科学的な回答をするのはいまだに難しいのです。このテーマは心理学では運動知覚といわれており、このことに関する実験的な研究を、知覚的な視覚現象と脳の生理学的な反応との対応づけを試みながら研究しています。特に最近では、脳の磁場変化を捉える脳磁図 (MEG) という装置を利用した研究を行っています。
2. 知覚には様々な錯覚が生ずることが知られており、特に視覚現象ではこれまでに多くの研究がなされています。図1は発見者の名前を冠した同心円錯視といわれるもので、左側の外円と右側の単円とは物理的に同じ大きさで描かれていますが、実際は左側の外円のほうが少し小さく見えないでしょうか（つまり右側の単円がより大きく見える）。このように単純な幾何学的な図形において錯覚が生ずることが知られており、この問題について、すでに100年以上にわたって研究が行われてきています。しかし、これもまだ心理学的に解決されていない問題の一つです。こんなことを研究しています。

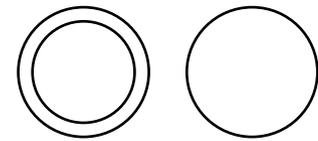


図1 デルブーフ錯視

研究から広がる未来と将来の進路

基礎的な心理学研究が、すぐに現実の場面や職業選択で役立つわけではありません。しかし、視覚的な錯覚などが影響し交通場面で事故を誘発するような場合があったり、動いているはずのものが「動いて見えなかったり」という我々の認知的なエラーはどういった状況で生じやすいのか、などの「人の特性についての科学的理解」は、各種の「人を見る目」を必要とする職業一般において役に立つものです。

主要学術研究業績

- 今井章 (2015). デルブーフ錯視からリップス大きさ錯視へ—内円が外円の外に移動する条件における事象関連電位の検討— 信州大学人文科学論集, 2(49), 91-105.
- 今井章 (2016). デルブーフ錯視からリップス大きさ錯視へ (2) —外円が移動する布置条件における事象関連電位の検討— 信州大学人文科学論集, 3(50), 63-75.
- 今井章・大内剛 (2016). 地域の防犯における標識看板制作の試み—自転車盗難の防止策として— 地域ブランド研究, 11, 1-13.
- Imai, A., Takase, H., Tanaka, K., & Uchikawa, Y. (2016). Magnetoencephalographic correlates of apparent motion illusion of beta movement. *Electronics and Communications in Japan*, 99, 46-54. DOI 10.1002/ecj.11785.
- 今井章・Y. ロッセッティ・P. レヴォル (2017). ディスクの回転による触覚の錯覚現象について—Cormack のコイン回転錯触の再考— 信州大学人文科学論集, 4(51), 85-91.

所属学会と学会での活動

日本心理学会会員 (1984年～現在に至る), 日本生理心理学会会員 (1986年～現在に至る), 同編集委員会委員 (2012年～現在に至る), 日本基礎心理学会会員 (1996年～現在に至る), 日本認知科学学会会員 (1996年～現在に至る), 日本認知心理学会会員 (2005年～現在に至る), 日本視覚学会会員 (2008年～現在に至る), 日本生体磁気学会会員 (2012年～現在に至る), 日本応用心理学会会員 (2012年～現在に至る)

経歴

- | | | | |
|----------|-------------------|---------|----------------------------------|
| 1989年4月 | 日本学術振興会特別研究員 (PD) | 2010年1月 | 信州大学人文学部教授 |
| 1990年4月 | 名古屋大学文学部助手 | 2013年4月 | 信州大学人文学部評議員・人文学部副学部長 |
| 1993年10月 | 信州大学人文学部助教授 | 2017年4月 | 信州大学学術研究院人文科学系評議員・学術研究院人文科学系副学系長 |
| 2007年4月 | 信州大学人文学部准教授 | | |



●研究分野 生態心理学, 身体心理学, 認知科学

●現在の研究テーマ

1. 複雑で多様な環境の中で、人間はいかに意味のある情報を知覚し行為を組織化しているかに関し、「人間-環境 (他者を含む)」をマクロな協調システムとして捉える観点から、ダイナミカル・システム・アプローチを援用し実証的研究を行っています。
2. 息が合った演奏、バレエダンサーの動きの美しさなど、アートの魅力について、客観的に評価する心理学的研究を進めています。

研究から広がる未来と将来の進路

心理学研究の実践を通じて、批判的な思考態度と実証科学的な問題解決能力を養い、現代社会における様々な課題に取り組む姿勢や感性を身につけます。卒業後の進路は、大学院進学や心理職の公務員、民間企業への就職など、多種多様です。

主要学術研究業績

- 高瀬 弘樹 (2017). 呼吸リズム解析の正常・異常 坂田 省吾・山田 富美雄 (編) 生理心理学と精神生理学 第1巻 基礎 (pp.200-205) 北大路書房
- 高瀬 弘樹 (2016). 呼吸 春木 豊・山口 創 (編) 新版身体心理学 (pp.59-74) 川島書店
- 高瀬 弘樹・田中 慶太・石津 智大・島津 直実・白石 智子・高木 博子・越川 房子・内川 義則・石井 康智 (2012). 脳磁図による瞑想時の脳活動に関する予備的研究 人文科学論集 <人間情報学科編>, 46, 33-38.
- 高瀬 弘樹・古山 宣洋・三嶋 博之・春木 豊 (2003). 二者間の呼吸と体肢運動の協調 心理学研究, 74, 36-40.
- Takase, H., Mishima, H., & Haruki, Y. (2002). Coordination between thoracic and abdominal respiration in relaxed and stressed situations. *Japanese Health Psychology*, 9, 33-47.

所属学会と学会での活動

日本心理学会, 日本生理心理学会, 日本認知科学会, 日本認知心理学会, International Society for Ecological Psychology 会員。

経歴

2002年3月早稲田大学大学院人間科学研究科博士課程単位取得満期退学。2003年博士(人間科学)。信州大学人文学部助手, 早稲田大学人間総合研究センター助手, 東京電機大学 21世紀COEプロジェクト助手をへて現在, 信州大学人文学部准教授。

心理学・社会心理学コース

社会心理学分野

●准教授 岡本 卓也



●研究分野 社会心理学, グループ・ダイナミクス コミュニティ心理学

●現在の研究テーマ

専門は社会心理学で、特に、地域や集団に所属することや、そこから離れていくことの心理的過程について研究しています。もともとは、集団への所属意識が高いがゆえに生じてしまう集団間コンフリクト、偏見や差別、ステレオタイプの問題を取り扱っていました。そこから派生し「場所」のもつ魅力が、移動すること（旅行や転居など）にどのような影響を与えるのか、また、どのような場所づくりを目指すべきなのか考えています。最近では、移動することとして、巡礼、登山行動へも対象を拡げており、これらの行為が自己過程に与える影響について実証的に研究しています。総合的に、人が場所とどのように関わるのか、その心のメカニズムを明らかにしていきたいと考えています。

地域や場所の問題を取り扱う中で安心できる場所についても考えるようになり、サードプレイスの機能、子どもの危険認知や安全意識の研究も行ってきました。それらを元に GIS と Web データベースを連携させた地域安全マップシステムの開発も行いました。また、写真を用いた調査法（写真投影法・PEN-A）についての開発・応用も行っています。

研究から広がる未来と将来の進路

人は、地域や集団から離れて生きていくことは出来ません。地域や集団と少しでも快適に関わる方法を知っていれば、より良く生きていくことが出来ます。まちづくりや組織作り仕事として携わる上で役立つだけでなく、一個人として生きる上でも、これらの知識や経験は有益なものとなるでしょう。

主要学術研究業績

【論文】

- 「登山行動に関する社会心理学的研究」関西学院大学社会学部紀要, 120, 167-180(2015)
- 「写真投影法による子どもの危険認知の把握」コミュニティ心理学研究, 18(1), 21-41(2014)
(日本コミュニティ心理学会 若手学会員研究・実践奨励賞 受賞)
- 「写真投影法による所属大学の社会的アイデンティティの測定」行動計量学, 36(1), 1-14(2009)
(日本行動計量学会 肥田野直・水野欽司賞 受賞)
- 「共有集団イメージ法を用いた集団間関係の解析の試み」実験社会心理学研究, 48(1), 1-16(2008)
(日本グループ・ダイナミクス学会優秀論文賞 受賞)

【著書】

- 「コミュニティの社会心理学」ナカニシヤ出版 (2013)
- 「集団間関係の測定に関する社会心理学的研究」関西学院大学出版会 (2010)
- 「集団間関係の社会心理学 北米と欧州における理論の系譜と発展」晃洋書房 (2010)



所属学会と学会での活動

- 【所属学会】 日本社会心理学会・日本グループ・ダイナミクス学会・日本行動計量学会
日本質的心理学会・日本心理学会・日本コミュニティ心理学会・社会調査協会
- 【学会役員】 日本コミュニティ心理学会研究委員会委員

経歴

広島県生まれ。2001年関西学院大学社会学部卒業、2006年関西学院大学大学院社会学研究科単位取得満期退学。2007年博士（社会学）取得。先端社会研究所 R.A., 関西学院大学社会学部助教、准教授を経て、2012年より現職。



●研究分野 「健康的に悩む」ために必要な資質とは何か？

●現在の研究テーマ

1. 認知行動療法の作用メカニズムを解明するためのアナログ研究

人間が悩むという行為は、心に痛手を負う危険性もありますが、同時に自分の視野あるいは未来を大きく広げるチャンスでもあります。清水研究室では「健康的に悩む」ために必要な要因とは何か？をテーマに「物事の捉え方のクセ（認知的側面）」と「状況に対応するための行動（行動的側面）」を主題としながら、健康な青年を対象とする調査・実験（アナログ研究）を行っています。

2. 森田療法が「とらわれ」を打破するまでのプロセス

「嫌なことを、気にしないようにしたら逆にその嫌な思考だらけに…」という経験はありませんか？これは「とらわれ」といって、悩みが下方螺旋過程をたどりつつ、増大している現象です。これに一日の長を発揮するのが日本生まれの森田療法です。なぜ“効く”のかについて科学的に調べています。

研究から広がる未来と将来の進路

人生が順調なときは良いのですが、真価を問われるのは「シンドイ」ときにどう対処できるか？です。

勉学・研究を通して、対人援助職である臨床心理士を目指す人もいれば、職業にしなくても学んだ知識を日常生活に生かし、ストレスマネジメントに活用する人もいます。広く応用できることが最大の強みです。

主要学術研究業績

【著書】

- 清水健司 (2015) . 現代社会と応用心理学 3巻 トピック9「介護施設の利用」を担当 85-94.
- 清水健司 (2013) . パーソナリティ心理学ハンドブック 第3部 14章 5節 「対人恐怖・対人不安・社会不安」を担当 433-438.
- 清水健司 (2011) . 自己愛の心理学 小塩真司・川崎直樹（編）第5章 自己愛と対人恐怖を担当 70-87.

【学会発表】

- Shimizu, K & Shimizu, H (2017). The influence of contingency of self-worth and achievement motivation on adaptation of undergraduate students. 2017 Hawaii International Conference on education.
- Shimizu, K & Shimizu, H (2016). Effects of cognitive therapy-based lecture and morita therapy- based lecture on rumination of undergraduate students. The 31st International Congress of Psychology.

所属学会と学会での活動

【主な所属学会】

- 日本心理臨床学会 正会員
- 日本心理学会 正会員
- 日本パーソナリティ心理学会 正会員 常任編集委員
- 日本LD学会 正会員

【資格】

- 臨床心理士（登録番号 No.10405）
- 特別支援教育士（登録番号 No.09-177）
- 認知症ケア専門士（認定番号 0501225）
- 専門社会調査士（認定番号 001173号）

経歴

特別養護老人ホーム（心理療法士）、中学校スクールカウンセラー、精神科クリニック、学生相談カウンセラー等にて勤務、日本学術振興会特別研究員を経て2008年に信州大学人文学部に着任、2010年より現職。

心理学・社会心理学コース

社会心理学分野

●准教授
長谷川 孝治



●研究分野 自尊心, 対人関係, 心理的 well-being

●現在の研究テーマ

1. ネガティブな自己評価の形成・維持プロセスに関する研究

自尊心の低い人は、自ら進んでネガティブな自己評価を実現させるような行動をとることが示されています。その鍵が、安心さがしです。安心さがしとは、恋人や親友に本当に自分のことを大切に思っていることかどうかを繰り返し確認する行動です。この行動は、自尊心の高い人でも同様にとるのですが、自尊心が低い人がとった場合には、相手から拒絶されることが分かっています。なぜそのような違いがあるのかについて、現在は SNS 上の対人関係にまで拡張させて、検討を行っています。

2. 心理的 well-being に関する地域連携プロジェクト

2015 年 10 月から 1 年間、行政や企業と連携し、地域での活動が参加者の心理的 well-being に及ぼす影響について、効果測定を行う共同研究を実施しました。具体的には、高齢男性を対象にボイストレーニングを行い、その結果、参加者の健康や配偶者とのコミュニケーションが良好になるかを準実験形式で検証しました。今後も、現場での社会心理学的研究を、産学官連携で実施していきたいと考えています。

研究から広がる未来と将来の進路

社会心理学は、人間行動を個人の特性だけでなく、対人関係や周りの状況の影響を重視して研究する学問です。この分野では、日常に起こるさまざまな出来事について、科学的な視点からとらえ、調査や実験によってデータを収集、分析し、論文や報告書にまとめるトレーニングをします。このような一連のプロセスを学び、身につけることは、広く一般企業や公務員としてデータを扱う仕事に生かすことができます。

主要学術研究業績

- 長谷川孝治・浦 光博 (1998). アイデンティティー交渉過程と精神的健康との関連についての検討 実験社会心理学研究, 38, 151-163 (日本グループ・ダイナミクス学会 平成 11 年度優秀論文賞 (若手研究者部門) 受賞論文) .
- 長谷川孝治・浦 光博 (1999). 自己評価に関する自他の相互影響過程の変容についての検討 —アイデンティティー交渉の理論的枠組みを用いて— 社会心理学研究, 15, 110-124.
- 長谷川孝治・宮田加久子・浦 光博 (2007). インターネット上の自己評価と現実の自己評価との相互影響過程についての検討: 両者のズレと精神的健康との関連の観点から 実験社会心理学研究, 23, 45-56.
- 長谷川孝治 (2008). 自尊心と安心さがしが他者からの拒絶認知に及ぼす影響 人文科学論集 (人間情報学科編), 42, 53-65.
- 長谷川孝治 (2016). ボイストレーニング・プログラムへの参加経験が心理的健康と夫婦間コミュニケーションに及ぼす影響——高齢男性と配偶者の Well-being を促進するか—— 日本グループ・ダイナミクス学会第 62 回大会

所属学会と学会での活動

〈所属学会〉

日本社会心理学会, 日本グループ・ダイナミクス学会, 日本心理学会, Society for Personality and Social Psychology, American Psychological Association

〈学会での活動〉

日本社会心理学会誌「社会心理学研究」編集委員 (2011 年 4 月～ 2015 年 3 月), 日本社会心理学会理事 (2015 年 4 月～ 2019 年 3 月)

経歴

2000 年 3 月 広島大学大学院生物圏科学研究科博士課程後期修了 (博士 (学術))。日本学術振興会特別研究員, 広島国際大学人間環境学部・助手などを経て, 2005 年 10 月に信州大学人文学部准教授。2014 年 4 月より信州大学学術研究院 (人文科学系) 准教授。

歴史学コース 日本史分野

●教授 山本 英二



●研究分野 日本近世史

●現在の研究テーマ

1. 慶安御触書に関する基礎的研究
2. 偽文書・由緒書に関する基礎的研究
3. 日本近世温泉史の研究

この他、長野県木曾郡王滝村御嶽神社や松本市白骨温泉、新潟県小千谷市魚沼神社、静岡県浜松市龍雲寺など、全国各地で古文書調査をおこなっています。



研究から広がる未来と将来の進路

最近5年間のゼミ卒業生の主な進学先と就職先

一橋大学大学院社会学研究科 館林市役所 長野県警察 八十二銀行 岐阜市役所 東和銀行 松本市役所 日光市役所 ほか

主要学術研究業績

単著 山本英二『慶安の触書は出されたか』（山川出版社 2002年）

山本英二『慶安御触書成立試論』（日本エディタースクール出版部 1999年）

共編著 山本英二・鈴木俊幸『信州松本藩崇敬館と多湖文庫』（新典社 2015年）

山本英二・白川部達夫『〈江戸〉の人と身分の近世史2 村の身分と由緒』（吉川弘文館 2010年）



所属学会と学会での活動

学会での活動 信大史学会会長 関東近世史研究会評議員

所属学会 信大史学会 関東近世史研究会 信濃史学会 地方史研究協議会 日本史研究会ほか

経歴

1992年 國學院大学大学院文学研究科博士課程後期単位取得満期退学 博士（歴史学・國學院大学）

1994年～ 信州大学人文学部



●研究分野 日本現代史，現代地域社会史

●現在の研究テーマ

1. 戦後地域社会史論

長野県とくに飯田下伊那地域を中心とした地域現代社会史を研究しています。具体的には、敗戦直後から1950年代までの時期について、村の政治の民主化運動（下伊那郡上郷村の事例）それらを行なった青年団運動、1950年代の文化運動などが研究対象です。

2. 戦後思想と地域の知識人

戦後思想が具体的にどのようにして地域において形成されたのか、それらはどのような社会集団によって担われたのかを研究しています。具体的には長野県出身のサークル文化運動家・白鳥邦夫の諸活動を追いかけています。

3. 歴史学と歴史教育／教科書裁判の史的分析

歴史学と歴史教育はどのような関係にあるのか、理論と実践の両面から研究しています。その際、1965年に提訴された教科書裁判運動が具体的な検討対象となります。

研究から広がる未来と将来の進路

地域においてすぐれた平和と人権が守られる社会を築くには、過去の人びとの営みを学ぶ必要があります。同時に、そうした理念はどのように生活に具体化され、人びとの討論（社会的なつながり）を基礎にして深められていたか、に注目する必要があります。今後の地域社会の諸課題を歴史的な文脈に即して考えて行くためには何よりも現代史（一戦後史）の知識が必要となるでしょう。

主要学術研究業績

- 『「銃後」の民衆経験—地域における翼賛運動』岩波書店，2016年
（民衆経験という視角から日中戦争から朝鮮戦争までの「銃後」社会を論じたもの、私の戦時社会論の1つのまとめ）
- 「歴史学と歴史教育」歴史科学協議会編『歴史学が挑んだ課題—継承と発展の50年』大月書店，2017年
（戦後における「歴史学と歴史教育」の関係をめぐる論点を紹介したもの、私の歴史教育論の1つの総括）
- 安田常雄編／大串潤児ほか編集協力『シリーズ戦後日本社会の歴史』全4巻，岩波書店，2013-14年
（戦後史を社会という視角から描いた論文集，主に第3巻の編集を担当，論考「戦後こども論」を第4巻に寄稿）
- 高等学校日本史教科書『新日本史A』2015年検定済（新訂版）実教出版（共著）

所属学会と学会での活動

歴史学研究会／日本史研究会／東京歴史科学研究会／同時代史学会（元・編集委員）／信濃史学会／長野県現代史研究会（事務）／信大史学会（編集担当理事）など。

経歴

東京学芸大学教育学部卒／同大学院教育学専攻科修了／一橋大学大学院社会学専攻科博士課程単位取得退学／信州大学人文学部専任講師・助教授・現在に至る。

●研究分野 日本古代史

●現在の研究テーマ

現代の日本につながるような社会や国のかたちが現れ出す「古代の日本」について研究してきました。

たとえば次のような問題に取り組んでいます。

1. 奈良時代や平安時代の社会のあり方や国家システムはどのようなものであり、それらは現代とどのような関係にあるのか。
2. 奈良時代や平安時代の文化は、どのように生まれ、現代の日本の文化とどのような関係にあるのか。



研究から広がる未来と将来の進路

いま私たちが住んでいる日本の国・社会・文化の成り立ちを解析していく作業は、自分たちが生きる環境（の深層）をねばり強く、客観的に分析することにつながります。社会のなかで解決していくべき問題が見つかったとき、その問題の構造を分析し、どこまでが固定された要素であり、どこが動かせる要素なのかを見極めることができれば、解決策もきつと考えやすいはず。これは研究者にかぎらず、広く社会を支え、より良くしていきたいと願う社会人・職業人にとって必須の技術ではないでしょうか。

主要学術研究業績

『平安時代の天皇と官僚制』（東京大学出版会、2008年）

10数年のあいだ書きためていた論文を統合した博士論文を本にしたものです。「日本古代の権力は、どのような原理で物事を決定していたのか？」がメインテーマです。現代に通じる、日本の国家システムについての研究です。

『国風とは何か』（鈴木靖民ほか編『日本古代交流史入門』勉誠出版、2017年に収録）

文化に関する一番最近の論文です。「日本的」だとされる「国風文化」の構造を明るみに出すことを試みたものです。漢文学・かな文学・絵画・仏像・仏教・食事など、さまざまな分野の研究成果を総合し、国風文化の骨格といえるようなものを抽出しました。それは大変意匠な姿をしていました。

『蔵人所の成立と展開』（『歴史学研究』937号、2015年に収録）

国家システムに関する最近の研究。この続きを早く研究したいと願っています。

所属学会と学会での活動

史学会、日本史研究会、歴史学研究会、日本歴史学会、大阪歴史学会、木簡学会、続日本紀研究会。
史学会大会報告（1995年）、日本史研究会大会報告（2003年）、歴史学研究会大会報告（2015年）。
そのほか学会研究会での口頭報告多数。

経歴

1992年3月、東京大学文学部卒業、1995年3月、東京大学大学院人文科学研究科修了、1998年3月、東京大学大学院人文社会系研究科を単位取得退学。1999年度、日本学術振興会特別研究員。2000年4月～2007年9月、東京大学大学院人文社会系研究科・文学部助手。同年10月から信州大学准教授。



●研究分野 清朝政治史・経済史

●現在の研究テーマ

1. 清朝政治史

中国という巨大な国家は、どのようにしてその政策を策定し、実施しているのでしょうか。現代では共産党独裁といい、前近代には皇帝独裁であると言われてきました。しかし「独裁」とは何でしょうか。「独裁」する立場にある人は、なんでも好き勝手に出来るのでしょうか。国家の政策というのは、なにに規定されて決まり、動いてゆくのでしょうか。17世紀から20世紀までを視野に入れつつ、特に清朝という王朝における政策決定過程（特に対外政策）について検討を行っています。

2. 清朝経済史

現在、中国の大国としての影響力はよく知られています。では、その影響力は昔から一貫したものなのでしょうか？じつはついこの間まで、中国経済は、むしろちょっと貿易赤字が増えるとあっという間に不況に突入する脆弱なものであると他共に認識していました。では、その脆弱性はどこからくるのか。いまでもあるのか。いつからあるのか。米価変動や国際貿易収支などの分析を通じて、長期的な経済構造変動の検討を進めています。

研究から広がる未来と将来の進路

歴史学は、結果がすでに出ている人間の行動や社会の動きを分析する学問です。東洋史学はアジア諸地域についての理解を深めるものですが、同時に、歴史学という学問手法を通じて、人間社会一般が持つ傾向なども幾分理解できるでしょうし、限りある材料を駆使して、自分の主張に説得力を与えてゆく技術も身につくでしょう。歴史学にかかわる知見は、成熟した社会の構成員に必要な要素のひとつとなるでしょう。

主要学術研究業績

『海賊からみた清朝：十八～十九世紀の南シナ海』（藤原書店，2016年）

18-19世紀に、中国沿海で活動していた海賊について、彼らの素性という社会経済的な側面のみならず、彼らを討伐しようとする清朝政府、あるいはイギリス、マカオのポルトガル人などがつむぎだす国際関係について分析を加えています（あんまりロマンのない話です）。

「嘉慶維新（1799年）再検討」（『信大史学』40, pp.1-26,60, 2014年）

18世紀を通じて漢人社会は急速な経済発展を遂げました。その漢人社会を治める清朝政府当局者たちは、拡大する漢人社会の影響力に配慮して漢人に受け入れられやすい態度を取るようになります。1799年に親政を始めた嘉慶帝の政策からこの間の政治構造変動を分析しています。



所属学会と学会での活動

史学会、東洋史研究会、社会経済史学会、中国社会文化学会、歴史学研究会、中国文史哲研究会、信大史学会、The Association for Asian Studies (AAS)

経歴

2002年 千葉大学文学部史学科卒業
2010年 東京大学大学院人文社会系研究科博士課程単位取得退学 博士（文学）
2010年4月～2013年3月 日本学術振興会特別研究員 PD
2013年4月～2014年3月 東京大学大学院人文社会系研究科研究員
2014年4月～ 現職

●研究分野 フランス近代

●現在の研究テーマ

1. 地方からみたフランス革命。近年は、フランドル地方の事例を多く扱っている。

研究から広がる未来と将来の進路

ヨーロッパ近代を正しく理解することは、国際交流や通商に関わる仕事で不可欠であることは無論ですが、そのみならず、どのような進路を歩む場合でも大切です。

主要学術研究業績

1. Maki SATO “L’ Amour de la patrie a toujours dirigé mes actions et les dirigera jusqu’ à mon dernier soupir, justification et autobiographie chez Ernest Duquesnoy” , Biard, M., Boudin, Ph., Leuwers, E., Omi, Y.,(dir.), L’ Écriture d’ une expérience, histoire et mémoires de Conventionnels, Paris, 2016.
2. 佐藤真紀「フランス革命期における秩序正しい暴力ーノール県ウプリヌ村食糧騒擾の事例からー」『歴史評論』718号, 2010年。
3. 「フランス革命期におけるメルヴィル Merville 市への軍隊派遣について」『人文科学論集』第41号, 2007年。

所属学会と学会での活動

日本西洋史学会, 日仏歴史学会, 史学会に所属。

経歴

1988年明治大学文学部史学地理学科西洋史専攻卒業。1991年成城大学大学院文学研究科ヨーロッパ文化専攻博士課程前期卒業。1997年成城大学大学院文学研究科ヨーロッパ文化専攻博士課程後期単位取得退学。1995年-1997年女子美術短期大学非常勤講師。1997年信州大学人文学部講師。2000年信州大学人文学部准教授。

比較言語文化コース

比較文学分野

●教授 野津 寛

●研究分野 西洋古典学・ギリシア語・ラテン語

●現在の研究テーマ

1. 古代ギリシア演劇，特に前5世紀の喜劇詩人アリストパネス。特にアリストパネスの喜劇作品の韻律とリズムの構造を，個々の作品全体に則して明らかにすること。「基盤研究 (C)2007-2008 古代ギリシア演劇における演劇構造と本文校訂の研究」
2. 西洋古典文学の研究。特にホメロス『イーリアス』とアプラーユス『変身物語』。
3. 文学言語としてのラテン語の発生と発展の歴史。ラテン語を古代ローマの言語としてではなく，ヨーロッパを造った文学言語・文化言語・普遍語として捉え，ヨーロッパ文学と西洋の様々な文化の起源を，中世のラテン語文学と古代ローマの古典ラテン語文学を経て，古代ギリシアのホメロスまでさかのぼる比較文学・比較文化・受容史的研究。
4. 近代日本におけるギリシア演劇の受容研究。「基盤研究 (C)2017-2019 日本におけるギリシア演劇の受容と世界的発信に関する実証的総合研究」

研究から広がる未来と将来の進路

西洋古典の学習・研究にはギリシアとラテン語のみならず英語，仏語，ドイツ語等，近代語の能力が不可欠。狭義の文学だけではなく哲学・歴史・宗教・科学・政治・法律・科学に対する深い理解が必要。周囲の無責任な発言に惑わされることなく，本物の広い教養を身に着け世界に通用する人間になれば自ずと道は開けるでしょう。

主要学術研究業績

学位論文：La structure symétrique et la composition eurhythmique de deux comédies d'Aristophane: *Les Acharniens et Les Oiseaux* (フランス国立リモージュ大学 2003).

著書：『ギリシア喜劇全集 1, 4, 8, 別巻』(共著, 岩波書店 2008-11). 『羅和辞典』(共著, 研究社 2009), 『ラテン語名句小辞典』(単著, 研究社 2010). 『ラ・トゥールー フランス語初級文法と会話』(共著, 駿河台出版社 2013). 『西洋古典のすすめ: シリーズ・ヨーロッパの文化 2』(共著, 成城大学, 2015).

学術論文：“比較文学としてのラテン文学：(1)Acquired Language” 信州大学人文科学論集 1, 185-209 (単著 2014). “Traductions japonaises d'Homère,” 信州大学人文科学論集 3, 83-88, (単著, 2016). “Métamorphose et exil chez Ovide et Apulée: Première Partie: 《carmen et error》,” 信州大学人文科学論集 4, 133-139, 2017). 他

所属学会と学会での活動

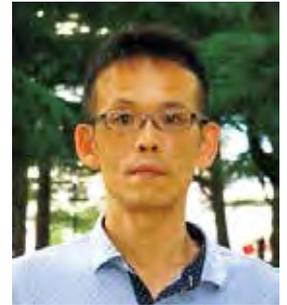
日本西洋古典学会 (会員)
日仏ギリシア・ローマ学会 (事務局長)

経歴

2004-2007, 信州大学人文学部 助教授
2007-2015, 信州大学人文学部 准教授
2015-, 信州大学人文学部 教授

比較言語文化コース 比較文学分野

●教授 澁谷 豊



●研究分野 日仏比較文学, フランス文学

●現在の研究テーマ

1. 比較文学

- a) 日本におけるフランス文学（フランスの象徴詩は日本でどんなふうを受け入れられたのか？等）
- b) フランスにおける日本文学（日本の俳句はフランスでどんなふうを受け入れられたのか？等）
- c) 近代日本人のフランス体験（両大戦間期のパリにおける日本人の出版活動を中心に）

2. フランス文学

- a) 両大戦間期のフランス文学（サン＝テグジュペリ，ラディゲ，ポーヴ etc. の読み直しと翻訳）
- b) 現代フランス小説（自伝の現代的形態としての「家系の物語」を中心に）

研究から広がる未来と将来の進路

文学の研究というのは、他者との（そして、多くの場合は「死者」との）対話に似ています。ときには、威勢よく雄弁をふるっている連中の陰にひっそりとたたずむ人の、消え入りそうな声に耳を傾けることもあるでしょう。そんな経験を積むことでどれだけ将来が広がるのか、それはよく分かりませんが、もしかすると、この（たぶんあまり面白くもない）人生が、少しは味わい深いものに思えるかもしれません。

主要学術研究業績

～著書～

- ・ *La Réception de Rimbaud au Japon. 1907-1956*, Atelier National de Reproduction des Thèses

～論文～

- ・ 松崎碩子, 和田桂子, 和田博文編『両大戦間の日仏文化交流』 ゆまに書房 平成 27 年（『ルヴュ・フランコ・ニッポンヌ』とルネ・モーブラン』 p. 91-109 担当）
- ・ 「金子光晴のパリ暮らし―読書―」 *Quatre Vents* 第 8 号 平成 22 年 p. 74-92
- ・ 松尾邦之助『巴里物語 [2010 年復刻版]』 社会評論社 平成 22 年（「資料論文『日仏評論』について―アミラル・ムーシェ街二十二番地―」 p. 341-362 担当）

～翻訳～

- ・ サン＝テグジュペリ『人間の大地』 光文社古典新訳文庫 平成 27 年
- ・ エマニュエル・ポーヴ『ぼくのともだち』 白水Uブックス 平成 25 年

所属学会と学会での活動

日本フランス語フランス文学会
日本比較文学会

経 歴

平成 2 年 3 月 早稲田大学第一文学部卒業
平成 15 年 6 月 パリ第四大学博士課程修了（文学博士）
平成 16 年 4 月 早稲田大学比較文学研究室助手（平成 18 年 3 月まで）
平成 18 年 10 月 信州大学人文学部助教授（平成 19 年 3 月まで）、平成 19 年 4 月より准教授（職名変更）
平成 30 年 4 月より現職

●研究分野 中国古典文学，近世の戯曲小説

●現在の研究テーマ

1. 中国における戯曲小説の変遷

中国の古典劇を、戯曲とよびます。それは元朝の時代（1206-1368）に、急速に発展しました。いっぽう小説ということばは、ふるくは『莊子』や『漢書』にでてきますが、宋代（960-1279）以降のつかいかたとはギャップがあります。こうした戯曲小説の変遷を、各種の作品群にそくして研究しています。

2. 文学と芸能や出版との関係

たとえば『三国志演義』は明代（1368-1644）に完成の域に達します。三国時代（220-280）から千年以上のあいだに、史実が文学へと姿をかえてきたのです。そのプロセスには、芸能や出版の影響がみとめられます。こうした文学と芸能や出版との関係について、近世（宋～清代）を中心に研究しています。

研究から広がる未来と将来の進路

温故知新（ふるきをたずねてあたらしきをしる）と言います。また欲窮千里目，更上一層楼（せんりのめをきわめんとほって、さらにのぼるいっそうのろう）とも言います。中国語を学び文学研究によって視野を広げ，リテラシーを高めた先輩たちは，就職や進学などそれぞれの道へと進んでいます。

主要学術研究業績

- ・清印本を中心とした『水滸伝』の研究（単著）
2016年3月 2013 - 2015年度科学研究費基盤研究（C）課題番号 25370397 研究成果報告書別冊
- ・『杜騙新書』訳注稿初編（共著）
2015年3月 『『杜騙新書』の基礎的研究』プロジェクト
- ・文簡本を中心とした『水滸伝』の研究（単著）
2012年3月 2009 - 2011年度科学研究費基盤研究（C）課題番号 21520368 報告書別冊

所属学会と学会での活動

日本中国学会，中国文学会，中国古典小説研究会など

経歴

1996年3月 京都大学大学院文学研究科中国語学中国文学専攻博士後期課程学修退学

比較言語文化コース

中国語学・文学分野

●准教授
伊藤 加奈子



●研究分野 現代中国語学

●現在の研究テーマ

1. 現代中国語（共通語）における動詞・副詞の振る舞い、またそれに関連する時間表現に興味があります。中国語は現在・過去・未来といった時制を示す動詞表現を持たず、一方動作の段階（完了・経験・持続 etc.）を示すアスペクト表現、更には結果や方向などを表す動詞に後続する補語が細かく分化しているという特徴があります。これらについて日本語と対照する手法を主に用いて考察しています。
2. 現代中国語（共通語）と日本語の間にある、親族呼称や家族関係表現の違いも興味があります。古き時代に中国語の文字である漢字が日本語に取り入れられたことにより、多くの中国語由来の語彙が日本語の中に入り込んでいますが、言語が異なるとその語彙が示す概念もやはり幾分異なったものになります。同じ植物の種子であっても蒔かれた土壌が異なると違った姿に育つように、語彙もそれが置かれた言語によってまた違った性格を示します。その違いを考察し明らかにすることを目指しています。

研究から広がる未来と将来の進路

中国語と日本語の違いを詳細に考察検討することで、それぞれの言語の特徴、ひいては物の考え方の差異までも深く理解することを目指します。観光から定住まで様々な形でアジアの人々との交流がますます盛んになる社会においては、その人々について日本人との共通点・相違点を意識することが不可欠です。アジアの言語の一つである中国語について、日本語と対照しつつその特徴・性格を把握することは、その言葉の使い手である人々に対する理解にもつながります。このような人間に対する理解は、私たちの暮らす社会を作る基礎になると考えています。

主要学術研究業績

「親族名称の他称用法に関する現代中日対照比較——“她妈”が「妻」となるときとは？」『信州大学人文科学論集』4号
「“其他”と「その他」』『信州大学人文科学論集』3号
「“正”の表す「ちょうど」とは何か？—“正想 VP 1 的时候 VP 2”の訳し方をめぐって—」『信州大学人文科学論集<文化コミュニケーション学科編>』42号
「中国語の“偶然”に関するノート」『信州大学人文科学論集<文化コミュニケーション学科編>』40号
「マルチメディア時代の外国語教育・III 音声・映像再生装置の現状と課題 1. 中国語のヒアリング—発音指導における機材利用について」『信州大学教育システム研究開発センター語学教育カリキュラム研究開発プロジェクトマルチメディア時代の外国語教育』
「“有”の談話的機能」『中国語学』245号

所属学会と学会での活動

日本中国語学会
日本中国学会

経歴

平成9年4月～ 信州大学人文学部専任講師
平成22年4月～ 信州大学人文学部准教授

比較言語文化コース

ドイツ語学・ドイツ文学分野

●准教授 磯部 美穂



●研究分野

ドイツ語造語法, 応用言語学, ドイツ語史

●現在の研究テーマ

これまでの研究では、自らのドイツ語学習の経験の中から、わからないことや説明できないことを問題として扱ってきました。現在は、日本語を母語とする私が、ドイツ語の文体的な慣習に添った、つまり、自然なドイツ語を書くにはどうしたらいいのかという問題から出発し、ドイツ語のテキスト構造における語法、とくに造語法の役割や機能について研究しています。研究成果の有効性や応用性については、学生たちと議論しながら検証しています。

また通時的な研究として「言語と社会」をテーマに、ドイツ語圏の文化史とドイツ語の歴史に関する文献や資料を集めています。社会が発展していく過程において、ドイツ言語文化の中心地の移行、その担い手となる社会層の広がり、それに伴うテキストジャンルの拡大、科学技術の発展とメディアの変化など、言語に影響を与えてきた様々な要因について研究しています。

研究から広がる未来と将来の進路

「戻って左へ曲がる」といった複雑な標識に従って、道に迷ったことはありませんか？ことばによるコミュニケーションにおいてしばしば【誤解】が生じるのはなぜでしょうか？—ことばは日常生活を始め、社会文化の営みと密接な関係にあり、人間活動に欠かせない重要な要素です。外国語のしくみを理解して自らのことばを見つめ直すと、「当たり前の世界」が「ちょっと魅力的な世界」に変わります。

ドイツ語の歴史、ドイツ語圏の文化をしっかりと学んだ卒業生は、国際感覚を身に付け、コミュニケーションのスキルを活かして情報を発信するメディア社会で活躍したり、日本とドイツ語圏の国々との懸け橋として国際的な企業で活躍しています。

主要学術研究業績

Wie tolerant muss das Korrekturlesen sein? Zur systematischen Korrektur im deutschen Sprachunterricht. Nu-Ideas. 12.2017.

文の連結意味と連結要素 短文投稿テキスト「読者の手紙 (Leserbrief)」, 信州大学人文科学論集第4号, 189-202頁, 2017.

Ein Schritt zum wissenschaftlichen Schreiben auf Deutsch. Eine Fallstudie: Verfassen eines Leserbriefs. NU-Ideas Vol.4 . 2. 2015, S.93-100, 2015.

Perspektivenwechsel und thematischer Anschluss als textuelle Leistung des Kompositums. Shinshu Studies in Humanities, No. 2, S. 189-196, 2015.

Eine Entwicklungsstufe im Ausbau des deutschen Wortbildungssystems. Ist die Abstrakta-Bildung nur für die Sprache der Mystiker charakteristisch? In: Sprache an medial-technischen Schwellen. Die Sprache ändert sich, aber wie? (IDE, Manshu Hg.). 日本独文学会研究叢書 100号, 3-12頁, 2014.

所属学会と学会での活動

日本独文学会
日本独文学会北陸支部
京都ドイツ語学研究会
大阪市立大学ドイツ文学会

経歴

1998年 信州大学人文学部卒業
2000年 東京外国語大学大学院前期博士課程修了 (ドイツ語学)
2008年 インスブルック大学博士号取得 (ドイツ文献学 Dr.phil.)
2010年より 信州大学人文学部講師
2015年より 現職



●研究分野 近現代ドイツ語文学

●現在の研究テーマ

1. ローベルト・ヴァルザー研究：

スイスの作家ローベルト・ヴァルザー（1878-1956）の作品、とりわけその文体の機能と成立背景を研究しています。近年ヴァルザーの作品は研究対象として注目されるようになっただけではなく、日本語を含めた様々な諸言語に翻訳され多くの読者を得ていますが、生前はそうではありませんでした。ごく限られた読者の中にはしかし、ヘルマン・ヘッセ、フランツ・カフカ、ヴァルター・ベンヤミンといった重要な作家・批評家が含まれています。彼らを中心とした同時代の文人たちとの比較も研究の対象としています。

2. 文化的記憶としての文学：

過去の記憶は、公的な歴史記述の中にだけ存在するものではありません。様々な文化的現象の中にもその記憶を見出すことは可能であり、しかも時には公的な歴史的言説とは対立する形で立ち現れます。文学がそのような文化的記憶としてどのような役割を果たし得るか研究しています。

研究から広がる未来と将来の進路

外国語の文学を詳細に読むこと、研究することがどのような役に立つのか、訝しく思われる方も少なくないでしょう。しかし、グローバル化、情報社会化さらには目まぐるしく変化する世界情勢の中にある我々にとって、新たな情報や状況を柔軟に分析し思考することは極めて重要なことです。外国語文学を読むということは、そのような能力を身に着ける恰好の場であり、より豊かな未来への入り口となります。

主要学術研究業績

日記の私—ローベルト・ヴァルザーの「日記」について（『詩・言語』82号、2016年）

ヴァルザーの遺稿中のテキスト『1926年の日記・断片』は普通の意味での日記ではない。このテキストの語り手は自らの体験を虚飾なく語ることを目指すのだが、絶えずその可能性について自己反省し、本来の目的から逸脱する。このようなテキストから通常の日記に期待される書き手の体験や心情の真率な描写を見出すことはできないが、その描写可能性をめぐる描写が精確に描かれているという点において、「日記」と呼ばれ得ると論じた。

物語と想起—グンター・グラスの詩学について（『武蔵野美術大学研究紀要』45号、2015年）

グンター・グラスの『ブリキの太鼓』『犬の年』そして『蟹の横歩き』における想起および物語行為を、アライダ・アスマンの文化的記憶理論、とりわけ「蓄積的記憶」と「機能的記憶」の相互関係に関する理論を援用しつつ、それが既存の歴史ないし勝者の歴史を動揺させるダイナミックなものであり、グラスの詩学において重要な要素であることを論じた。

所属学会と学会での活動

日本独文学会会員
日本独文学会関東支部会員
国際ローベルト・ヴァルザー協会会員

経歴

1987年千葉県生まれ。立教大学文学部卒業、東京大学大学院人文社会系研究科修士課程修了、同博士課程単位取得満期退学。オーストリア政府給費留学生としてグラーツ大学留学（2015～2017年）。

比較言語文化コース

フランス語学・フランス文学分野

●教授 吉田 正明



●研究分野 フランス文学

●現在の研究テーマ

1. フランスにおける詩と音楽との関係についての研究。
2. シャンソンの歴史とシャンソン文化論。

以上の研究テーマを踏まえて、現在は科研の研究課題として、19世紀中葉から20世紀初頭にかけてのシャンソン作家の諸相及びシャンソンと文学との影響関係についての研究に従事している。それに関連して、モンマルトルに開花した「シャ・ノワール」などの文芸キャバレーの実相と、シャンソニエと作家や詩人や芸術家たちの交流と、そこから生まれてきた新たな文化・芸術についての研究を進めている。

研究から広がる未来と将来の進路

最近の研究テーマである文芸シャンソンの成立過程や、当時活躍したシャンソニエの果たした役割を明らかにすることで、フランスにおいてシャンソンがどのように発展してきたかを多角的な視座から探求している。これにより日本におけるシャンソンの学術的研究の基盤を構築することを目指している。

主要学術研究業績

1. キャバレーとシャンソン「シャ・ノワール」を中心にして、『シャンソン・フランセーズ研究』第8号 (pp.63-84), 2016年, 文芸キャバレー「シャ・ノワール」で歌われたシャンソンの考察。
2. 19世紀パリにおけるキャバレーと新聞、『シャンソン・フランセーズ研究』第7号 (pp.63-80), 2015年, 19世紀パリのキャバレーと新聞との関係の考察。
3. ペルエポックとシャンソンーカフェ・コンセルのスターたち、『広島大学フランス文学研究』31号 (pp.1-16), 2011年, ペルエポック期のカフェ・コンセルで活躍したスター歌手たちの紹介とシャンソンを巡る時代背景の考察。
4. フランス詩と音楽ーフランス・ルネサンス期の詩と音楽、『シャンソン・フランセーズ研究』第3号 (pp.36-54), 2011年, ロンサルを中心にフランス・ルネサンス期の詩と音楽の関係を考察。
5. アラゴンとシャンソン、『シャンソン・フランセーズ研究』第2号 (pp.1-20), 2010年, アラゴンの詩をシャンソン化したジャン・フェラとブラッサンスを取り上げ、原詩とその変容の様を検討。

所属学会と学会での活動

1. 日本フランス語フランス文学会会員 (1983年4月～現在に至る)
2. 日本音楽学会会員 (2003年6月～現在に至る)
3. シャンソン研究会代表 (2005年4月～現在に至る) 毎年2回の研究会開催と年1回発行の研究誌『シャンソン・フランセーズ研究』の編集に従事。

経歴

- 1986年4月 広島大学文学部助手 (1987年3月迄)
1987年4月 信州大学人文学部助手 (1988年3月迄)
1988年4月 信州大学人文学部助教授 (2007年3月迄)
2007年4月 信州大学人文学部准教授 (呼称変更による, 2008年12月迄)
2008年1月 信州大学人文学部教授 (現在に至る)



●研究分野 19世紀フランス文学，生成論

●現在の研究テーマ

1. 生成批評(草稿研究)の立場からバルザックを中心とした19世紀フランスの文学テクストに取り組んでいます。保存されている制作資料をもとに作品の成立過程を仔細に検証し、作家の想像力の展開や作品の意味作用の変容を跡付けるアプローチです。近年はバルザック『パリにおける田舎の偉人』や『セザール・ビロトー』を主な分析対象として自筆草稿や校正刷り等の検証を進め、特にジャーナリズムの主題の導入の問題から作品の新たな読解を模索してきました。作中の再登場人物群がどのように編成されているかについても解明を進めています。
2. バルザックの作品における食卓の表象について、日仏の研究者と共同研究を推進しています。国際シンポジウム「バルザックと食卓の表象」(日本フランス語フランス文学会『リテラ』シンポジウム支援採択事業)を2017年9月に開催しました。フローベールやゾラに先駆けて小説の中で登場人物の飲食(日常の飲食から最高級的美食まで)を仔細に描いたバルザックが多様な食卓の場面を通じて提示した意味作用について考察を行っています。

研究から広がる未来と将来の進路

19世紀フランスの小説は、単行本・新聞・雑誌とさまざまな印刷媒体に掲載されて流布していきました。作品がどのように執筆され、受容されるかはこうしたメディアのあり方と不可分の問題です。生成論による文学研究は、人間の想像力とメディアの来べき新たな関係を見えていくためにも重要な役割を担うアプローチです。

主要学術研究業績

- ・真野倫平編『近代科学と芸術創造—19世紀～20世紀のヨーロッパにおける科学と文学の関係』、行路社、2015。(共同研究プロジェクトの成果をまとめた共著、第15章・第16章 pp. 261-299 担当)
- ・Takayuki Kamada et Jacques Neefs, *Balzac et alii. Génétiques croisées. Histoires d'éditions*, GIRB, 2012. [電子出版] (パリ・ディドロ大学で主宰した国際シンポジウムにもとづく共編著)
- ・アントワヌ・コンパニオン『アンチモダン 反近代の精神史』松澤和宏監訳、名古屋大学出版会、2012。(共訳書、pp. 120-144, 292-350 担当)
- ・《Fonctionnement de la technique des épreuves chez Honoré de Balzac》, in Alain Riffaud (dir.), *L'Ecrivain et l'imprimeur*, Presses Universitaires de Rennes, 2010, pp. 279-291. (ルマン大学で開催された国際シンポジウム「作家と印刷業者」報告集に掲載の論文)
- ・*La Stratégie de la composition chez Balzac. Essai d'étude génétique d'Un grand homme de province à Paris*, Surugadai-shuppansha, 2006. (パリ第8大学に提出した博士論文をもとにした著作)

所属学会と学会での活動

日本フランス語フランス文学会会員
国際バルザック研究会(GIRB)執行部メンバー
研究雑誌 *Revue Balzac* (クラシック・ガルニエ社) 編集部メンバー
パリ第8大学叢書「近代の草稿」アドバイザリーボード委員

経歴

名古屋大学大学院文学研究科博士課程を経て、パリ第8大学および高等師範学校(ENS-Ulm)に留学。フランス政府給費留学生(1999-2000年度)。文学博士(パリ第8大学)。名古屋大学COE研究員、同文学研究科留学生専門教育講師を経て、2010年10月より信州大学人文学部准教授。

英米言語文化コース

英語学分野

●教授 伊藤 壘



●研究分野 英語史, 中世英語・北欧語文献学

●現在の研究テーマ

僕は4つの研究テーマを持っている。

1. 多種多様な言語文化との接触により成り立っている英語の歴史の中で、特に北欧語との接触によって、どんなことが起きたのかを明らかにすること。一番分かり易い例は「木曜日」。現代英語の Thursday は、古い北欧語 Thursdagr に由来する。つまり外来語なわけ。どうしてそんなことが起きたのか、まだ誰もわからない。だから、研究したい。
2. 北欧神話が日本のマンガにどうして沢山登場するのか、という謎。なぜ、敢えて北欧神話？日本人にとっての北欧神話ってどんな意味があるの？
3. エルフ語の研究。エルフ語はオクスフォード大学教授 J.R.R. トールキンが考えた創作言語。でも、世界中で使われたり、研究されたりしている不思議な言語。
4. 中世の詩の世界。詩に詠われる内容や、何百年も昔の「ことばづかい」を学ぶことで、現代の英語話者が無意識に感じている事柄を明らかにしたいと望んでいる。

研究から広がる未来と将来の進路

大学では、英語オタクを育てたい。英語はコミュニケーション・ツールだけれど、そのツールは謎に満ちている。お話をするために英語を学ぶのではなく、その英語の過去や未来を語ることで、英語話者も知らない英語の裏話、舞台裏を暴き、現代英語を無意識に使う人々のウラをかければ最高だね。

学生諸君は、英語の過去や未来について、日本人だけでなく世界中の人に伝える仕事を見つけてください。

主要学術研究業績

- ・「ハムレットの父の系譜と Anglo-Saxon Kingdom の王の系譜：神話と歴史文献学との狭間の研究ノート」 *Colloquia* (Keio University) vol.20 (1999), pp.9-23.
 - ・「第六章 トールキンのファンタジー：創造力の源泉としての中世英語・北欧語文献学」成蹊大学文学部学会編『探求するファンタジー』成蹊大学人文叢書7 東京：風間書房，2010年，pp.181-225.
 - ・「北欧語から英語への借入語としての Troll」『信州大学人文科学論集<文化コミュニケーション学科編>』46号(2012), 69-83.
 - ・「生き埋めにされた伝説：ヒストリーとストーリーの狭間のイングランド黎明奇譚」『ユリイカ：詩と批評』49巻21号(2017年12月：特集 カズオ・イシグロの世界), pp.203-213.
- 他、論文・邦訳多数。

所属学会と学会での活動

- ・日本アイスランド学会 事務局 (2002-2004)
- ・日本中世英語英文学会 編集委員長 (2014-2016)
- ・日本歴史言語学会 (2017-)
- ・Viking Society for Northern Research (University of London)(2006-)
- ・International Saga Conference ; International Advisory Board (2009-)
- ・Cumberland and Westmorland Antiquarian and Archaeological Society (2011-)

経歴

- 1991-92年 アイスランド大学アイスランド政府奨学金給付留学
- 2000年 スウェーデン、メーラルダーレン大学スウェーデン語研修受講
- 2001-2009年 杏林大学外国語学部 講師・助(准)教授
- 2009～ 信州大学人文学部

英米言語文化コース

英米文学分野

●教授 杉野 健太郎



●研究分野 アメリカ文学・文化、映画学

●現在の研究テーマ

1. アメリカン・ドリームの文化学

アメリカの建国理念であると同時に近代啓蒙の理念である「アメリカン・ドリーム」が文学作品や映画作品でどのように表象されているかを研究しています。成果の一部が、杉野編『映画とネイション』（ミネルヴァ書房、2010）に収録されています。かなり前に出版予告されたままの学術研究書『ドリーミング・アメリカ アメリカン・ドリームの文化学』を完成することが目標です。

2. F・スコット・フィッツジェラルドの長編小説における近代化および世俗化の研究

科研費基盤研究（C）採択の研究課題です。アメリカの作家のなかでもとりわけモダンとポストモダンとの境界上にあると思われる、20世紀初頭のアメリカの作家フィッツジェラルドの小説における近代化と世俗化（宗教の影響力の弱まり）を研究しています。まず、学術研究書『ギャツビーとモダン・アメリカ F・スコット・フィッツジェラルドの『グレート・ギャツビー』を読む』の刊行を目論んでいます。



研究から広がる未来と将来の進路

英語圏の文学や文化あるいは映画を学びます。大学院へ進学する学生もいますが、ジェネラリストとして就職する学生がほとんどです。就職業界は多岐にわたります。

主要学術研究業績

- ・杉野健太郎編『映画とイデオロギー』、ミネルヴァ書房、2015年。
映画『イーザー・ライダー』におけるイデオロギー対立の誕生を論じています。
- ・杉野健太郎編『交錯する映画 アニメ・映画・文学』、ミネルヴァ書房、2013年。
F・スコット・フィッツジェラルドの小説『グレート・ギャツビー』の映画へのアダプテーション作品『華麗なるギャツビー』（1972）を論じています。

次のような学術概説書なども公刊しています。初学者のみならずおすすめします。

杉野健太郎編『アメリカ文化入門』、三修社、2010年。／諏訪部浩一編『アメリカ文化入門』、三修社、2013年〔共著〕。／Sugino, Kentaro. "F. Scott Fitzgerald in Japan." *The F. Scott Fitzgerald Society Newsletter*. Vol.25 (2016-17), April 2017, pp. 18-21. ／『アメリカ文化事典』（2018年、丸善出版）〔項目執筆〕



所属学会と学会での活動

日本映画学会会長（2018年度より／2017年度まで副会長）、日本F・スコット・フィッツジェラルド協会評議員、日本英文学会中部支部理事・大会準備委員会委員長、日本アメリカ文学会中部支部幹事を現在務める。
その他の所属学会は、アメリカ学会、The F. Scott Fitzgerald Society、The Society for Cinema and Media Studies (SCMS)、The Modern Language Association (MLA)、日本映像学会、など。

経歴

1961年岐阜県生まれ。上智大学文学部哲学科ならびに英文学科卒業。1989年上智大学文学修士（英米文学）、1989年駒澤大学苫小牧短期大学専任講師、1992年広島大学総合科学部専任講師、1995年助教授、1997年信州大学人文学部助教授、2011年より現職。ウィスコンシン大学マディソン校、カリフォルニア大学パークリー校客員研究員を歴任。

英米言語文化コース

英米文学分野

●准教授 飯岡 詩朗



●研究分野 アメリカ映画史・映像文化

●現在の研究テーマ

第二次世界大戦終結後から1950年代にかけてのハリウッド映画を主な研究対象としています。この時代は、ライフスタイルの変化やテレビの隆盛などにより、アメリカの映画産業が危機を迎え、変革を迫られました。そうした変革期のハリウッド映画を、詳細なテキスト分析に基づきながらも、現在では忘れられたり見過ごされたりしている事実を掘り起こし、同時代の歴史的コンテクストに埋め直すことをとおして、新たな相貌を浮かび上がらせようとしています。現在、特に注力しているテーマは、テレビがアメリカ全土の家庭に普及していく50年代前半までにハリウッド映画に現れた変化を、単にテレビと映画との関係にとどまらない、隣接するメディア間の影響・浸透です。この時代には、スクリーンのワイド化が進みますが、大きなスクリーンと立体的な音響での鑑賞は、それまでの映画体験よりも遊園地のアトラクションや現代のVRデバイスでの体験に似通っています。また、同時期には劇場テレビという興行も見られましたが、これは映画館のデジタル化後に一般化した非映画コンテンツの映画館での鑑賞と近似しています。

このように映画史の研究は現在の映像文化の研究と結びついていきます。

研究から広がる未来と将来の進路

映画の研究には、映画をその表現技法に着目して見る／聴く訓練が必要になります。その習得は、メディアを批判的に読み解く力の習得にもなり、メディア関係の職業を進路に考えている人にとって意義があるでしょう。一方で、英語圏の映画を研究する上で、英語圏の歴史や文化に関する英語文献の読解も必要になるため、異文化間のコミュニケーションや英語を用いた職業を進路に考えている人にとって意義があるでしょう。

主要学術研究業績

- 『七年目の浮気』とワイドスクリーン反美学——テレビ時代のハリウッド映画にみる間メディア性『応用社会学研究』第59号(2017): 156-183頁。 ※TVに抗する新技術時代の映画の間メディア性を考察。
- 『テレビに順ずる／抗するハリウッド——「アイ・ラブ・ルーシー」の二度の映画化をめぐる』『応用社会学研究』第58号(2016): 105-118頁。 ※人気TVドラマの映画化のプロセスと観客の受容を考察。
- 『遅れて来た男——「花嫁の父」(1950)における観客のいない演技者』『信州大学人文科学論集』第2号(2015): 197-217頁。 ※同名の原作小説、雑誌の写真特集、映画の関係を考察。
- 『知らなすぎた男——ダグラス・サーク『いつも明日がある』と笑い』『人文科学論集〈文化コミュニケーション学科編〉』第47号(2013): 87-108頁。 ※サーク作品と同時代のTVドラマの関係を考察。
- 『フィルム・アート——映画芸術入門』D・ボードウェル、K・トンプソン(名古屋大学出版会,2007)共訳。 ※英語圏でもっともスタンダードな映画学の教科書の翻訳。
- 『映画の政治学』長谷正人・中村秀之編(青弓社,2003): 171-218, 362-365頁。 共著。

所属学会と学会での活動

日本映像学会およびアメリカ学会に所属しています。
日本映像学会では、機関誌『映像学』の編集委員を3期務めています。
アメリカ学会では、アメリカ学会編『アメリカ文化事典』(丸善出版,2018)で、アメリカ映画史に関する項目を執筆しています。

経歴

立教大学大学院文学研究科博士前期課程修了後、立教大学アメリカ研究所に常勤嘱託として勤務。
2002年4月より信州大学人文学部専任講師。2008年9月より信州大学人文学部准教授。
2006年3月より特定非営利活動法人コミュニティシネマ松本CINEMA セレクト理事。

●研究分野 日本文学

●現在の研究テーマ

寺社資料や伝承資料の調査を通して、中世（平安時代末～戦国時代）から近世（江戸時代）における、寺院勢力の変遷や、僧侶たちの学問のあり方を研究しています。

たとえば、諏訪地方の寺院資料や、文書、棟札、銘文などを見ていくと、諏訪地方では、まず天台宗寺院の活動が見られ、鎌倉時代後期になって禅宗が入ってくることがわかります。ただし、その活動は天台宗寺院にとってかわるほど大きなものではなく、やがて室町時代になると真言宗寺院が台頭、江戸時代を通して諏訪の地に君臨することが明らかになってきました。

また、僧侶たちは、勉強をするために、全国各地の寺院を巡りました。室町時代から江戸時代に残された資料を見ていくと、北は青森県から、南は鹿児島まで、僧侶の学問ネットワークが広がっていたことがわかります。



研究から広がる未来と将来の進路

古代から近現代の文学を研究し、教員を目指す他、寺院、神社、旧制高校などの調査で様々な資料の取り扱いに習熟し、学芸員を目指す卒業生も多数います。

主要学術研究業績

寺院資料調査と文学研究, 仏教文学, (42):pp.4-8 2017(Apr. 30), 単著
ベトナム社会科学研究所蔵・旧フランス極東学院日本語資料調査の経過報告－和装本資料群の特徴について, リテラシー史研究, (10):pp.19-25 2017(Jan. 20), 単著
善光寺（諏訪市）蔵『当寺記録帳』紹介と翻刻, 信州大学附属図書館研究, 6:1 2017(Jan. 99), 共著
真言宗以前－諏訪における鎌倉～南北朝期の寺院展開, 三弥井書店, 『諏訪信仰の中世』, :pp.239-258 2015(Sep. 04), 単著
五十嵐日記 古書店の原風景, 笠間書院 2014(Nov.), 共著
加持祈祷する僧侶たち, 勉誠出版, 小峯和明編『東アジアの今昔物語集』, :pp.138-151 2012(Jul.), 単著
関東元祖俊海法印, 竹林舎, 阿部泰郎編『中世文学と寺院資料』, :pp.476-500 2010(Oct.), 単著

所属学会と学会での活動

2010-, 仏教文学会, 委員
2014-2016, 全国大学国語国文学会, 編集委員
2007-2015, 説話文学会, 委員
2005-2006, 中世文学会, 委員
2002-2006, 日本文学協会, 委員

経歴

1998-, いわき明星大学 人文学部 助手
2002-, 信州大学 人文学部 助教授
2015-, 信州大学 人文学部 教授

●研究分野 日本近世文学・出版文化研究



●現在の研究テーマ

1. 江戸時代は、出版文化の発達に伴い大きな社会変容が起こった時代です。それは、人間の生き方・心のありようを映す文芸の内容にも顕れているとの観点から、特に17世紀に成立した浮世草子などの諸文芸について調査分析を行い、当時の人々の考えやものの感じ方の変容、さらには江戸から明治に至る、時代の大きな流れにも考えを及ぼしたいと考えています。
2. 江戸時代の木版本を中心に古典籍の調査を行っています。最近、長野県内に点在する古典籍の書誌調査を通じ、江戸時代から現代へと繋がる情報の伝達・保存の問題を考えています。

研究から広がる未来と将来の進路

古典や歴史は、現代を生きる私たちと切り離された、遠い過去のものではありません。むしろ、自分たちは、遙かな過去から連なる歴史・文学史の最先端を生きているとの自覚を持って広い視野を保ち、未来への責任を自覚しながら、地に足の着いた思考能力を獲得したいと思っています。将来どのような道を選ぶとしても、そのような思考と人文知とは、きっと人生の大きな充実に繋がってゆくでしょう。

主要学術研究業績

『仮名草子集成』第58巻（柳沢昌紀，入口敦志，富田成美，速水香織，松村美奈編，東京堂出版，2017年11月）

江戸時代初期に成立した書籍群・仮名草子の叢書。各作品について最善本を選定・翻刻し，全作品に解題を付す。58巻では『囃物語』『春風』『春寝覚』を担当する。

『中山道関連書籍の出版に見る三都本屋仲間の相克』（『国語国文』86巻1号，pp.48-64，2017年1月）

江戸時代に数多く刊行された道中記や道中絵図のうち，中山道に関するものを取り上げ，内容の類似と相違とを指摘，それぞれの出版経緯を探る。

『好色五人女』巻二における「ぬけ参り」の意味（『皇學館論叢』48巻6号，pp.1-26，2015年12月）

井原西鶴の浮世草子『好色五人女』巻二「情を入し樽屋物かたり」の中盤に語られる主人公一行の伊勢参宮―「ぬけ参り」が，話の展開においてどのように機能しているのかを論じる。

所属学会と学会での活動

所属学会：日本近世文学会，日本文学協会，鈴屋学会，皇学館大学人文學會
委員：日本文学協会委員，皇学館大学人文學會学外委員

経歴

2007年皇学館大学大学院博士後期課程国文学専攻修了。中京大学国際教養学部非常勤講師，同朋大学文学部非常勤講師，皇学館大学教育開発センター助手，同文学部助手を経て2013年より現職。
博士（文学）。

日本語文化コース

日本語学分野

●教授 山田 健三



●研究分野 日本語史学, 日本語学

●現在の研究テーマ

1. 方言も含め日本語の様々なシステム（音韻、文法、書記）とその歴史的变化といったテーマや、辞書研究から言語生活史の一端を明らかにする活動など、多方面のテーマ下で研究活動をしています。
2. 中でも目下の関心課題は「日本語書記技術システム史研究」。従来、漢字からの漸次的変化と目されることの多かった平仮名やカタカナの成立や、その歴史の実態について再検討を行っています。様々な歴史的文献に現れる仮名関係の用語を丁寧に読み込む文献言語史学的手法のみならず、比較言語学的復元方法（内的再建）などを駆使し、抜本的な見直し作業を行い、その成果として「男手」も「女手」もそれぞれ仮名の一種であり、男手は漢字とみるべきではないこと、「平仮名」と「(女手) 仮名」とは異なるものであること、仮名の成立問題は日本列島だけではなく、大陸や半島を含めた東アジアで考える必要のあること、などの研究を公表しています。我々がこれまでに「常識」として受け入れてきたことの研究成果基盤には、必ずしも堅固ではない場合が少なくないことを示す一例です。現在は文字だけではなく「句読法」を含めた「書記システム」全体から日本語の書記方法変遷の実態と要因解明に向かっていきます。

研究から広がる未来と将来の進路

研究室で学んだ学生さんは、人文学部が最も重視する「実践知」が活かせる場、公務員、中学・高校教員、民間企業など多方面で活躍しています。大学院（修士課程）に進学した上で更に分析能力に磨きをかけ、公務員、高校教員、民間企業で活躍する修士生や、更に他大学大学院（博士課程）に進学し、大学教員になる学生など多種多様です。

主要学術研究業績

【著書】

山田健三 解題（2017）単著『和名類聚抄 高山寺本』（新天理図書館善本叢書）八木書店

山田健三（1994）共著『日本古辞書を学ぶ人のために』世界思想社、他

【論文】

山田健三（2018 予）仮名をめぐるターミノロジー（『信州大学人文科学論集』5（通巻 52）号）

山田健三（2017）和名抄にみる古点以前の万葉集（『万葉集研究 37 集』塙書房）

山田健三（2016）草体漢字と字体標準（『漢字字体史研究（二）・字体と漢字情報』勉誠出版）

山田健三（2015）「成立期の仮名」をめぐる日本語書記システム史上の諸問題（『日本史研究』639 号）

山田健三・奥瀬真紀（2014）敬語接頭辞「オ-/ゴ-（御）」の使い分け原理試論：ポライトネス理論の視点から（『信州大学人文科学論集』1（通巻）48 号）

山田健三（2004）係り結び・再考（『国語国文』73-11）

山田健三（1998）しほといふ文字は何れのへんにか侍らん：辞書生活史から（『国語国文』68-12）、他

所属学会と学会での活動

所属学会は、日本語学会（平成 25 年 6 月～ 28 年 5 月は編集委員（含査読委員））、日本言語学会、訓点語学会、日本方言研究会など。

経歴

愛知県名古屋出身。名古屋大学大学院文学研究科博士課程後期。愛知女子短期大学人文学科（平成元年 4 月～ 3 年 3 月）、愛知学院大学教養部（平成 3 年 4 月～平成 10 年 3 月）を経て、平成 10 年（1998）4 月より信州大学人文学部。平成 21 年 4 月より教授。平成 29 年 4 月より人文学部長。

日本語文化コース

日本語学分野

●准教授 白井 純



●研究分野 キリシタン語学, 印刷出版技術史

●現在の研究テーマ

1. キリシタン語学

16世紀末期から17世紀初頭にイエズス会が日本で金属活字を用いて出版した語学・宗教文献の研究で、文法、音韻、語彙、表記などの各分野について、原典資料を重視する文献学的立場に基づき横断的に研究している。ラテン語を中心とする諸言語が複雑に関係する文化的背景がもとで成立した文献を読み解く経験を蓄積することは、現代のグローバル社会を独自の視点から理解する契機ともなるだろう。

2. 印刷出版技術史

日本と西洋の印刷出版技術の歴史的研究と、それが言語表現にどのように影響したのかを言語学的視点から研究している。西洋において15世紀に成立する金属活字印刷は諸言語（俗語・口語）の標準化を促し、近代的国家に必要な標準語の成立につながったことが知られているが、同じことがどのように日本語に影響したのか、東洋独自の事情を考慮しつつ中近世の日本語文献を中心として解明することが課題である。

研究から広がる未来と将来の進路

専門性が活かせる職種として中高等学校の国語科教員がある。その他の進路は大学院進学、公務員、一般企業であり、その意味では人文学部の他の分野と大きな違いはない。研究上、日本語を中心として様々な言語に触れる経験があるので、日本語と外国語の接触や、ことばによる表現にかかわる職種に向いている。

主要学術研究業績

【著書】

『ひですの経 ハーバード大学ホートン図書館所蔵』八木書店、2011

当該分野を代表する研究者の一人として、新発見キリシタン版『ひですの経』の原本調査に基づく写真複製、本文翻刻を行い、解説を執筆して刊行したものを。

【研究論文】

『キリシタン版の刊行と日本語学習』（福島金治編『学芸と文芸 生活と文化の歴史学9』竹林舎）2016

日本語学習、宣教と言語学（Missionary Linguistics）の観点からキリシタン語学の現在を概説した。

『「原田版こんてむつすむん地」の版式について』（『訓点語と訓点資料』135輯、訓点語学会）2015

京都で出版された『こんてむつすむん地』の印刷技法を活字印影の詳細な調査により明らかにした。

所属学会と学会での活動

日本語学会、訓点語学会（委員）、北海道大学国語国文学会（評議員）、キリシタン語学研究会（幹事）

経歴

北海道大学大学院文学研究科博士後期課程中退（1999）[最終学位：文学修士]、北海道大学文学部助手（1999-2000）、北海道大学大学院文学研究科助手（2000-2005）、信州大学人文学部講師（2005-2010）、信州大学人文学部准教授（2010-現在に至る）

日本語文化コース

日本語教育学分野

●教授 沖 裕子



●研究分野 現代日本語学, 日本語教育学

●現在の研究テーマ

1. 言語学・現代日本語学
 - 1) 現代日本語の談話論
 - 2) 日韓中対照談話論
 - 3) 日本語方言における文法と談話の接点の研究
 - 4) 言語接触からみた気づかれにくい方言の研究
 - 5) イントネーション文法と談話展開の研究
2. 日本語教育学
 - 1) 異文化コミュニケーションからみた日本語教育方法の開拓
 - 2) 日本語教育学における学的枠組みの構築
 - 3) 日本語教員養成論

研究から広がる未来と将来の進路

現代日本語の研究をしています。世界の言語の一つとして日本語のしくみを解明すること、外国人が生きた日本語を学びやすいよう基礎研究を行うことが課題です。

日本語の基礎研究から、新しく有効な外国人のための日本語教育方法が生まれます。また、日本語を母語とする人にとっては、日本語という言葉について深く考え、自分自身を知ることにつながります。

主要学術研究業績

【単著】

2006年『日本語談話論』和泉書院 *日本学術振興会学術図書出版助成による出版

【共著】

2015年『跨文化理解と日語教育（異文化理解と日本語教育）』高等教育出版社、北京

2015年『柳田方言学の現代的意義—あいさつ表現と方言形成論』ひつじ書房

2010年『方言の発見—知られざる地域差を知る』ひつじ書房

2008年『シリーズ文と発話2 「単位」としての文と発話』ひつじ書房

2005年『新ことばシリーズ18 伝え合いの言葉』財務省印刷局

2003年『朝倉日本語講座4 言語行動』朝倉書店

2001年『応用社会言語学を学ぶ人のために』世界思想社

1999年『どうなる日本のことば—方言と共通語のゆくえ』大修館書店

所属学会と学会での活動

日本語教育学会（審査・運営委員 1999年～現在）日本語学会（評議員 2003～2015；大会運営委員 2002～2004）日本方言研究会（世話人 2002～2008）社会言語科学会（理事 2003～2009；広報委員長 2007～2009；学会誌編集委員 2000～2006；大会発表賞選考委員 2001～, 2015～2017）日本語文法学会（学会誌編集委員；2000～2004）韓国日本語学会（海外一般理事 2013～現在）長野・言語文化研究会（代表 2015～現在）

経歴

博士（文学）2005年、東京都立大学

東京都立大学大学院人文科学研究科修士課程修了（1980年）、博士課程単位取得満期退学（1986年）

花園大学専任講師、助教授を経て、信州大学人文学部助教授（1993年）、教授（2002年～現在）

日本語文化コース

日本語教育学分野

●准教授 坂口 和寛



●研究分野 日本語教育学, 日本語教師養成

●現在の研究テーマ

1. 日本語教師に必要な「日本語分析力」とは

日本語教師は、専門書や辞典などを使って日本語の勉強をします。しかし、本などで学べることや解決できることにも限界があり、日本語知識の増強だけでなく教師自身による日本語分析も不可欠です。教師にとって修得や向上が必要な日本語分析技術を探っています。

2. 日本語についてわかりやすく説明する技術とは

日本語分析だけでなく、日本語の表現や文型について外国人学習者にわかりやすく説明する指導技術も日本語教師には求められます。例文を活用しつつ、日本語表現について学習者の理解を促進する説明のあり方を明らかにしようとしています。



研究から広がる未来と将来の進路

日本語教育学や日本語教師を専門的に学び研究することは、“わからない人にわからないことをわかりやすく伝える”技術の修得にもつながります。日本語母語話者にも外国人学習者にも日本語はわからないことばかりです。学習者の正確な理解を促す日本語指導技術は、日本語教師に限らず、日本語使用者として、また社会の一員として、重要な「ランゲージーツ」ともなるはずです。

主要学術研究業績

- ・『映像化ストラテジーにより類義語の正用文から想起される『映像』の特徴—日本語教育経験者の例文分析過程からわかること』（『信州大学国際交流センター電子紀要』論文番号 10, 2015 年）[共著]
例文から想起した視覚的イメージを言語化する「映像化ストラテジー」に着目し、日本語教育経験者が類義語の例文について描写する事からの特徴を探った。
- ・『日本語教師養成講座の受講者が行う類義語の言語特徴分析：類義語の特徴説明に見られる傾向と問題点』（『信州大学人文科学論集』第 1 号, 2014 年）
日本語教師養成コースの被養成者の類義語分析と言語特徴説明について、焦点化される言語特徴と分析手続きから傾向や問題点を示した。
- ・『日本語教師の日本語分析技術を養成するストラテジートレーニング—独習型教材の開発』（小林ミナ・日比谷潤子編『日本語教育の過去・現在・未来 第 5 巻 文法』[第 6 章執筆], 凡人社, 2009 年）
初心者の日本語教師を対象とした日本語分析ストラテジートレーニングの独習型教材を作り、その有用性と妥当性を検討した。

所属学会と学会での活動

所属学会：日本語教育学会, 日本教育心理学会, 日本語教育方法研究会

経歴

1998 年東北大学大学院文学研究科博士課程後期単位取得退学。信州大学人文学部講師（留学生専門教育教員）、大月市立大月短期大学准教授を経て、2009 年より現職。

人文学部研究紹介冊子

信州大学人文学部研究紹介

2017-2018

〒 390-8621 長野県松本市旭 3-1-1

TEL.0263-37-2233 / 3393 FAX.0263-37-2235

発行日：2018年3月1日 発行：信州大学人文学部

